

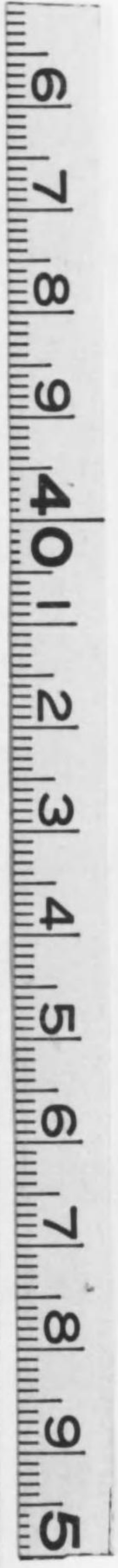
338-378



1200501395568

338

378



始



338-378



1200501395568

338

378

入屋山くさ
第之弱茶田卷



七
の
物
目

白鳥
如
子



338-378

序

五十といふ歳は、孔子が天命を知るといふた歳である。何となう落ちついた気分になつて来るものだ。何をみても、よしよしとうなづかれるやうな気分になつて来る。ソクラテスが人間は五十にならなければ人の長となることが出来ないといつたことも深い意味のあることだと思はれる。その五十の年頃は老境であるといはれてをる。私はその老境に及んで今までに見なかつた明るさを感じずにはゐられない。肉眼の視力は減ずるけれど、心眼はたしかに開けて来る。私が四十八の歳から五十の歳までに、心静かなをりにその静かさを記した文章をあ

つめたのが本書である。今度、印度佛跡巡拜の旅にのぼるに際し、『釋迦基督その他』の一書と共に本書を出版して記念とすることは、私の禁じ得ない悦びであります。静かな豊かな気分、秋の空のやうに澄み切つた心持、それは私のこの頃のあこがれであります。印度に渡らうといふ心もそのあこがれの一つの現はれにすぎないのであります。

大正十五年十一月二十九日

北安田にて

曉 烏 敏

目 次

一。老境の黎明……………	三
二。一佛の世界から多佛の世界へ……………	二七
三。誰か自由を獲得する者ぞ……………	四〇
四。衆に聞く心……………	五三
五。豫想に裏切られたる時……………	七一
六。寂 寥……………	九三
七。哀 愁……………	一一二
八。願 慧……………	一三〇
九。二月十五日の記……………	一五一
一〇。忍受による超越……………	一五九
一一。苦を觀じて……………	一八七

一一。率直なる自己の表現について……………二一〇

一二。晩春茶話……………二二一

一三。破壊と建設……………二二七

一四。標準肖像の決定……………二五四

一五。病苦に當面して……………二七一

一六。涙のにじむ生へ……………二七七

一七。既成宗教の根本誤謬と新興宗教の眞核……………二九一

一八。一人出家すれば九族天に生る……………三一二

一九。太陽をあこがれて……………三三四

二〇。秋 日 賦……………三四九

二一。苦痛の内省……………三五七

二二。劃一へか又か……………三七八

二三。超國家的思想の方へ……………三九五

二四。虚無の底から……………四二〇

二六。天を司る者……………四四二

二七。立腹者の日記……………四六九

二八。闘争を超えて……………四七七

二九。諸佛讚歎の願をしのびつつ……………四九九

三〇。人からうしろ指をさされるやうなものになるな……………五〇七

三一。京の一夜……………五一八

三二。或養鶏家の言葉……………五三四

三三。清 閑……………五五三

三四。法について……………五七七

三五。問題の精査……………六一七

三六。信心の道味と土味……………六三三

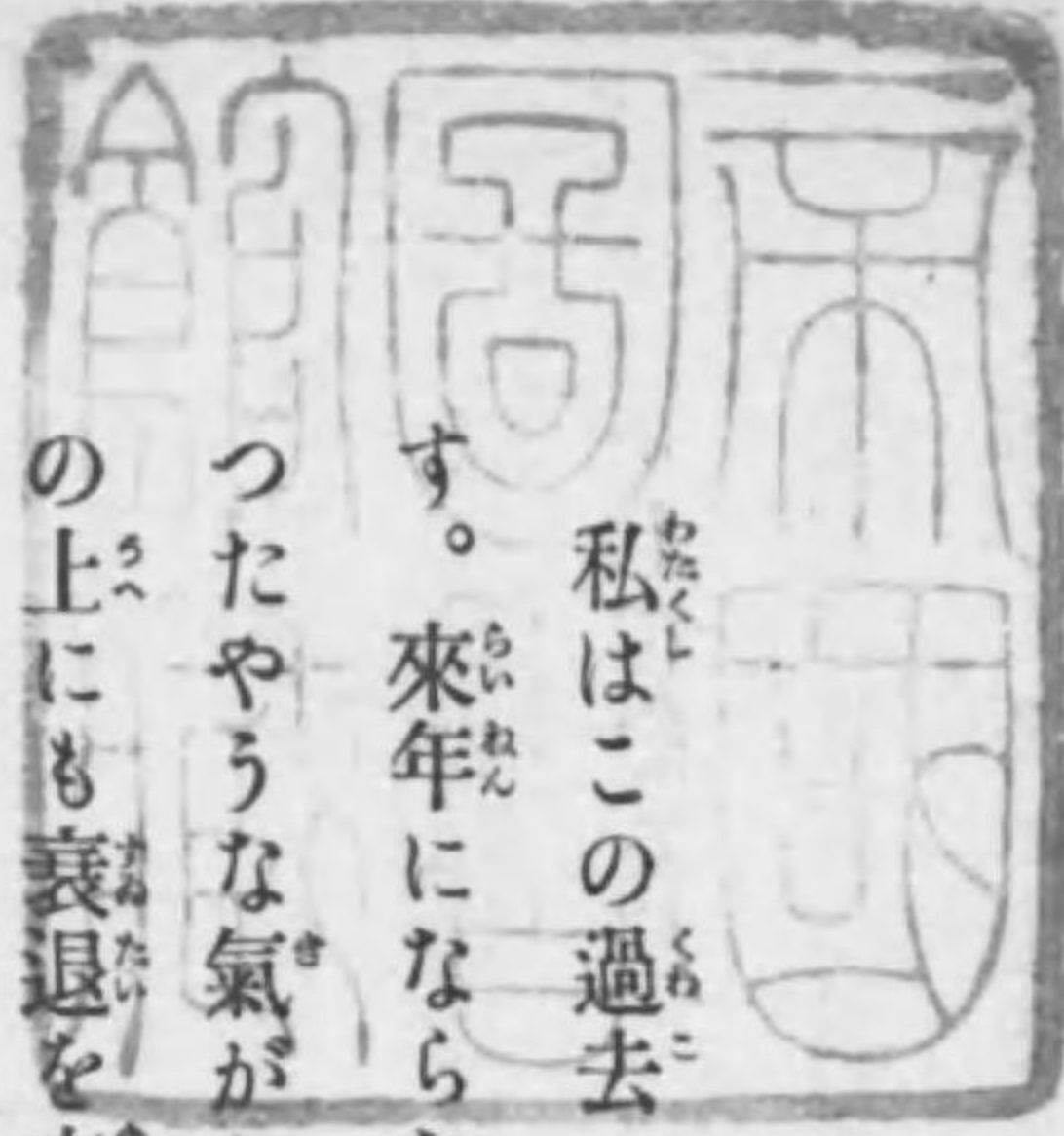
三七。涙……………六四七

三八。三昧から……………六五五

老境の黎明

曉鳥敏著

一。老境の黎明



私はこの過去一年の間に餘程年を取つたやうな氣持を味うてをります。來年にならなければ五十には達せないのであるが、大分老境に入つたやうな氣がしてゐます。身體には別に衰へも感じませぬし、精神の上にも衰退を來たしてをるとは思ひませぬ、さうしてゐて老境に入つたなといふ氣がしてをります。食ひものもうまいし、道を歩いてもつらいこともないし、徹夜をして本を讀んでもたいした疲れもしないし、寧ろ壯年時代よりも約二三倍の氣力を以て研學に従事することが

出来るのであります。だから老境に入つたといふことと衰退期に這入つたといふのは違ふのであります。ではその老境とはどんなことか。

二。

昨年さくねんの一月いちがつに母ははを失うしなうて以來いらい、引續ひきつづいて親おやしい人達ひとたちの死しに逢あうたので、私わたくしの頭腦づなうには死しの影かげが何時いつも往來わうらいするやうになつてをります。何かしてをるうちに直すぐに死しんだ人達ひとたちの上うへを思おもひます。そして自分じぶんの死しを思おもひます。言いふまでもなく生物せいぶつ的本能ほんのうの死しの恐おそれはあるのであります。すが、それでゐて自分じぶんの死しが左程ほど恐おそろしくないやうな思おもひがしてゐます。生きてをればしたいことも澤山たくさんあるし、することが面白おもしろいし、それがぼちぼち出來でて行くといふ樂たのしみもあるので所謂いふ生きて行く道みちが

閉塞ひさいしてをるといふわけはないのであるが、何時いつ死しんでもよいといふやうな氣きがしてをります。それで、やつてをることについては熱心ねつしんに精進しやうじんはしてをるものの、何時いつ死しんでも遺憾いかんのないやうな氣きがしてをります。一時ひととき悲觀ひくわんに陥おちつた時ときに世よの中の凡たゞてがつまらなく見え、何事なにごとにも手てがつかんといふのではなくて、私わたくしは深い悲かなしみの中なかにあつてます。ます自分じぶんの求道きうだうには精進しやうじんしてをるのであります。書物しょぶつを讀よむとか思索しよくをするとかいふやうなことに於かける精進しやうじんはますます力ちからを添そへるやうであります。さうしてゐて中心ちゆうしんに何か何時いつやめてもいいやうな至極しごくかるやかな氣きがしてをります。今死いましぬと思おもふと心こころにかかるのは妻つまのことである、けれども彼かれも常つねに獨立どくりつ者の心こころを味あじうてをるから立派りつぱに一人ひとりの道みちを行いくに違ちがひないといふ思おもひがします。或あるは私わたくしが死しぬことによつてま

すます彼の心境がさえて行くやうにも思へます。次に心にかかるのは
學生時代から書物道樂で自分の趣味に従うて財囊の許す限り、といふ
よりも許さぬ程度までに蒐集した一萬ばかりの書物、その一冊一冊に
少くともページをくる位に接觸してをるので、これが散逸するのは惜
しいやうな氣がする、これも死んだあとはどうなつてもたいしたこと
はないといふ思ひに出るのである。自分のやつて行くことはいくらで
もあつて、からだが三つも四つもあつたつて閑でこまるといふことは
毛頭ないのである。だからというて、今死んでも何等の遺憾もないや
うに思はれます。過去を顧みてもそのやつて来たことが、世の所謂善
であらうが悪であらうが、兎に角好きなやうにやつてきた、自分の思
ふだけのことを出来るだけの力をこめてやつて来た。今の眼から見

は、どのこともどのことも愚かなことばかりやつて来たやうに思はれ
るけれど、その折々はその時の全分をつくしてやつてきたのだから別
に遺憾もない、過去を顧みても未來を考へても別に死んではなら
ぬといふ氣がしなくなつた。今かうやつてをればたいした満足といふ
でもなし、又不満足といふこともない、東西古今の自分の好きな本を讀
んでをると、日本中の親しい友達から珍らしい食物や品物を送つてよ
こされる、自分が言ひたいと思ふことを喜んで聞いてくれる人は少く
はなし、自分がなんでも書けばすぐに書物にはして貰へるし、天下に
一人として私を束縛する人もなし權威もなし、まあこれで私自身には
言ひ分のない境遇にをるので勿論世の中がいやだといふやうな心は持
つてをらぬ、別れに逢うて深い悲しみにはいつてゐても、こんなに悲

しい位なら死んだ方がましだといふやうな心はなくて寧ろその悲しみを悲しみつつ自らのいのちをいたはるといふやうな心持がしてをります。それであつて決して死ぬことがいやだとは思つてゐませぬ。死よ、何時でもお迎ひにおいで、といふやうな軽い心持になつてをります。この心持をすつかり言ひ表はす言葉は今一寸みつかりませぬが、それに稍近い言葉でいふならば、私の母が病床にあつて「死んでもよし、生きてゐてもよし」というたやうな心持であるのであります。かうした心持になつてみると、死を願ふでもなければ生を願ふのでもなく、死を厭ふのでもなく生を厭ふのでもなく、どちらにも執着がないやうであります。だからなんだか身軽い氣持になつてをります。

三。

狂言をみると「何かといふうちにはや上下の街道に出て候。」といふ言葉があります。私は「なにかといふうちに墓場の道に出て候。」といふ大衆の言葉を聞くのであります。皆死ぬのだ、老人も死ぬ、青年も死ぬ、美人も死ぬば醜婦も死ぬ、愚者も死ぬば賢者も死ぬ、ブルジョアも死ぬばフロレタリヤも死ぬ、亞米利加人も死ぬば日本人も死ぬ、ロマノフ家のニコラスも死んだ、レニンも死んだ、シーザーも死んだ、ブルタスも死んだ、釋迦も死んだ、耶穌も死んだ、秀吉も死んだ、石川五右衛門も死んだ。死といふことを考へてみると人生はなかなか面白い。町を歩いて澤山の人をみる時に、これ等の人達もみんな死ぬの

だなどと思ふと、一種言ふことの出来ない面白味を感じる。それもきまつて死ぬのならたいした面白いこともないが不定の順序で突發的に死んで行くのだからますます面白い。老人が死ぬかと思へば子供が死ぬ、正直なものが若死するかと思へば、あまされ者が長生きする、病人が残つて看護したものが死ぬこともある、そこに面白味があるのだ。學校へ行つてみると若い人達が集つてゐる、男の學生でも女の學生でも若い人達の姿は華やかである、そのはなやかさを見てをつて死を思ふ時に、面白いなと叫ばずにはをられぬ。

かういふやうなことを書いてをると人或は「汝は氣が違うたのでないか。」といふかも知れぬ。普通人の心では死といふことを思ふと恐ろしくなり、心がめいつて行くものだけに、死を思ふと面白いなんとい

ふとちよつと風變りのやうに思はれます。この風變りが私の老境に入つたと思ふ一つなのであります。

四。

死ぬといふことを考へてみると人生における萬事が餘りたいたいものでもないやうに思はれるやうになります。善だ悪だ、正だ邪だ、眞だ偽だ、いやあれが勝つたいや敗けた、資本主義がどうだ、労働者がどうだ、普通選舉がどうだ、婦人參政權がどうだ、陸海軍の縮少がどうだ、學校の増設がどうだ、みんなたいしたことないやうな氣がする、どつち行つたつて、どうなつたつてたいしたことないやうに思はれます。國家の前途が危いというたり、いや前途が安心だというたり、い

やそれでは道に叶ふというたり、いや叶はんというたりしてをるが、「なにかといふうちに墓場の道に出て候。」です。先日來大谷派の部内でもごてごてがあつたらしい、そのをりに涙骨さんから、なんか意見を發表せよというてよこされたが、私にはどつちがどうなつてもよいやうな氣がしてをるのでなんにも書きませんでした。どつちもつまらぬといふよりも、どつちの言ひ分も無理もないと思はれるし、同時に又たいしたことでもないと思はずにをられないのであります。

今期の議會に、衆議院で可決した普選案が、貴族院で暫く保留されてゐた時に、新聞などでは随分やかましく論じましたし、ちよつと私も單に普選案といふもののためではなくて、日本の民衆の心持の上においてよからぬ結果を起しはすまいかといふ念慮から、貴族院が早く

通過せしめたらよからうと思つてみた、それもよく考へてみるとどつちでもよいやうに思はれて來た。普選でなければならぬといふこともなければ、普選であつてはならぬといふこともなし、普選になつたつてたいしたことでもなからうし、普選案が成立しなかつたつてたいしたこともないやうに思はれて來た、いづれみな墓場の道へです。

今日では米國が無暗に強國になつて暴威を振ふというて憤慨してをる人もあるが、米國だつてやはり墓場の道にあるのだ、外からあせらなくても、窮まれば轉ずるのです、盛なるものは衰へるのです。死の前にはこれも小さなことです。

死を思ふときに世の中の一切がなんでもないやうな軽い氣持になると同時に、世の中の一切の人のいうてゐることがみな無理のないやうに聞えてきます、みな尤もだと思はれるやうになつてきます。夫婦喧嘩をしてをる人の兩方の言ひ分がもつともだと思はれるやうになつてきます。ブルジョアの言ひ分も尤もであるし、プロレタリアの言ひ分も尤もであると思はれます。敵と味方と分れてをる時に、敵の考も尤もであるし、味方の考も尤もであると思はれます。だから、一方を肯定して一方を否定するといふことが出来ないやうになつてまゐります。あれも尤も、これも尤もと兩方を肯定せずにはをられなくなつてまゐります。自分と他人との對立の上においても、自分のやつてをること、尤もであるし、自分のやつてをることについて非難をするのも尤も

であると思はれて來る。それで自己も肯定すれば他人も肯定する、善も肯定すれば惡も肯定する。なにもかもつまらないやうに否定し去る心持と同時に、なにもかも高く肯定することが出来るやうになつてまゐります。出來るといふよりも寧ろせずにはをられなくなつてまゐります。孔子が「君子の道は忠恕のみ。」というてをられます。この恕の字が老境に入つた人の言葉だと思はれます。あれも尤も、これも尤も、自分も尤も、他人も尤も、善も尤も、惡も尤もといふやうにいへば、常識の考からは氣狂ひのやうにきかれまゐります。常識の考では兩立すべからざるやうに考へられることが、死に當面してをる者の心には兩立することが出来るのであります。だから、そこには敗けるの勝つといふやうな心は動きませぬ、萬人はみな止

むを得ぬ願に生きてをる、萬物はみな必然の願に生きてをることが味はれます。佐藤一齋が「風雨止むを得ざるに起り雷霆止むを得ざるに鳴る。」というた言葉を思ひだします。なんでも一齋があこの言葉を「言志曰録」に書いたのは老境に入つた後のことと思ひます。常識の考では兩立すべからざることのやうに思はれることが、兩立しつづつ縛々として餘裕あるかの如く考へられるのは、それは常識からいへば狂氣の沙汰であつて、それが老境の一つの味ひであります。

六。

『法華經』などは釋尊の老境に到られた心持だと思ひます。聲聞・緣覺に成佛を許し、自分を害しようとした提婆に成佛を許し、八歳の龍女

の成佛を語り、草木國土悉皆の成佛を語り、十如是を語り、如是本末究竟と喝破した所、孔子の所謂忠恕の心持であると思ひます。如是如是、なんとといふ面白い言葉であらう。柳は緑、花は紅、敵と味方と兩立し得ることは、畑の中に大根と牛蒡が兩立し得るやうに天地は廣く出來てをるのであります。釋尊がこのゆるやかな心持を述べて、最後にすべての人を尊敬し禮拜する常不輕菩薩のことを語られたのも味ひのあることだと思ひます。

死に對して涙ぐましい心を味うてをるものは、人生のすべてをあるがままに生きたまふに見るのであります。潤ひのある眼を持つて生きた萬物をはぐくむのであります。一物も殺すに忍びない心が生れてをります。善人を殺すに忍びないと同時に悪人も殺すに忍びない心にな

つてをります。害虫を取り除くにも、雑草を抜くにもいたいたい心を味ふやうになるのであります。

『佛説無量壽經』に釋尊が語りあらはされた阿彌陀如來は「十方衆生至心信樂して我が國に生れんと欲ひ乃至十念して若し生れずば正覺を取らじ。」と十方衆生の前に我が胸を開いた心はたしかに老境の味ひであります。男子もいらず女人もいらず、賢者もいらず、愚者もいらず、男女善惡の凡夫をはたらかさぬ本願はたしかに一切肯定の世界であります。

一切肯定の世界、みんなもつともだといふ涙ぐましい世界は、生死巖頭に立つた人にのみ味はれる世界であります。

七。

みんなが尤もだと思はれるやうになると同時に、ものの判断が容易につかぬやうになつてまあります。とても裁判官にはなれさうもなくなつてまあります。四五日前にある處で講演をした後に、それを聞いてゐた聽衆の一人が「あなたのお話は語尾が不明瞭であつて聞きにくかつた。」といひました。從來は話をはきはきしてゐて語尾に力のある話をする人といはれてゐたに、今その反對の評を聞いたのでどうしたわけかと考へて見た。一つはこの頃鼻がつまるので、息苦しくて言葉の終ひまで息が續かないから語尾に力がぬけるのであらう、然し他にもう一つ原因があると私は思ふ。それは私の頭腦がはつきりとも

を断定しきれなくなつてをるからであらうと思ひます。「かうである。」といふ裡からすぐに「さうでないかも知らぬ。」といふ心が起る。自分には善いと考へてをることでも、他人が悪いと考へるかも知れないとすぐに思ひつく。さうして自分の考にも無理もなければ他人の考にも無理がないと思ふので、どうしても物が断定しかねます。若し断定してもその断定が、次の断定で打ちこはされることを豫期してをります。従つて他の人達があまりに自分だけを肯定してをるのを聞くと随分かた苦しいと感じます。かうした氣持から普遍妥當性などをいうてをる人を随分僭越な人だと思はれます。私は一切の事の上に普遍妥當性があるといふよりも寧ろ非普遍妥當性があるものだと思つてをります。といふのは、或る人がAと断定すればその反面に非Aといふ断定が出

來得るものだと思はれます。さうしてその兩方に眞實があるといふことを味うてをります。かうした心で學者達のいふことを聞くと餘りにぎこちなく聞えてまあります。いや國家主義でなければならぬ、いや社會主義でなければならぬ、いや個人主義でなければならぬ、理想主義、自然主義、表現主義、未來主義、はてはダダ主義でなければならぬといふ。さうしたことを聞くと、まだ若いなと感ぜずにはをられませぬ。

宗教部内の人の話を聞くと、耶穌教でなければならぬ、いや佛教でなければならぬ、いや神道でなければならぬ、南無阿彌陀佛が本當だ、南無妙法蓮華經が本當だ、南無大師が本當だ、その他何が本當だ、何が本當だと随分やかましくいうてをります。それ等の人達の言ひ分は

みな尤もであります。私は南無阿彌陀佛もよし、南無妙法蓮華經もよし、神道もよし、佛教もよし、耶蘇教もよし、ダダもよし、表現主義もよし、未來主義もよし、國家主義もよし、共產主義もよし、個人主義もよし、社會主義もよしみんな好いと思ふ、みないうてをる人の心持に尤もな所があるやうに思はれる。然し、これ等の人達が自分のいふことに餘りに信賴しすぎて、自分の考以外に何等の眞實がないかのやうに考へ、自分の考だけに普遍妥當性を認めようとしてをる、その心持にだつて無理はないと思ふけれど、なんだか眼が動かんといへばいいか、血のめぐりが鈍いといへばいいか、まだ若いなあといふ氣分がしてなりません。自分は細い一本の道を過ぎて行くのであります、その道に絶對の光を認めるのは尤もであるけれど、他人が他人の細い

道を進んでそこに絶對の光を認めてゐることも無理のないことだと思ひます。かう考へて來ると餘りに人の世話をやいて普遍妥當性を云々する人達よりも一心專念に我が道に進んでをる人の方がなつかしう思はれます。自分もまたますますさうなつて行くやうな氣がしてをります。すべてを否定し、すべてを肯定する、この老境の心持にはますます細い針の穴よりももつと細い自分の道がはつきりと見出されるやうに思はれます。すべてがもつともだと思ふと同時に、自分の行く道は細い細い一筋道であることに氣がつかます。その氣がつけばつくほど、その道に進めば進むほど、すべてがもつともだといふやうに思はれてまゐります。すべてをもぎとられたもの、即ち生死巖頭に立つた者には自分で拵へる所の生の道は最早途絶えてをります、だから、生を求

めて生きるのでもなければ、死を求めて死ぬのでもなく、生を超え死を超え、更に自分の自覚を超えて必然が自分の上に生きて行く、誰にも強ゆることの出来ない、誰からも曲げられることの出来ない白道を生きることを、自覚を超えたる自覚によつて知ることが出来ます。これと同時に、自分以外の他のすべての生物がみなその一道を進んでることに気づかずにはをられませぬ、さうしてすべてに合掌する心になつてまゐります。

八。

カーライルが嘗てその著「サーターレザータス」に於て「永久の否定と永久の肯定とは一致する。」といふことを書いてゐたのを不圖思ひ出

しました。これも老境の一つの光景であると思ひます。押しも押されもせぬ自分の白道が見出されてをる人でなくては、かうしたことがいはれないと思ひます。

親鸞聖人が八十餘歳になられてから後に「善悪の二つ總じてもつて存知せざるなり。」と申されたことを、これまでからも度々味うてきたことでもあるが、その言葉のしつくりした潤ひのある味ひをこの頃に至つて漸くほのかに味ひ得るやうに思うてをります。「善悪の字知り顔は大そらごとのかたちなり。」と申された言葉なども深い體驗の上からでなければ、出てこない言葉だと思はれます。かうした言葉の味ひを味ふについても、ほのかに味ひ得たといふだけで、すべてを味ひつくしたといふことの出来ないのが今の私の心境であります。

ある。ちやうどそれは明なる鏡に影がうつるやうなものである。これに反して騒々しい心、曇つた心、濁つた心には、ものの如實の相はうつらないのであります。

浮きたつてをる騒々しい心には、如實の人心はうつらないのである。これに反して、しんみりと悲しみに沈んだ、いはば涙ににじんだ心こそ、尊い人の心の如實の相がうつるのであります。

「深い定の門に住して、悉く現在の諸佛を觀る。」と記してあるのは味ひのある言葉であります。

二。

二十年程以前に、我が國において、見佛とか見神とかいふことがや

かましよういはれたことがある。綱島梁川氏が見神の實驗を記したのを始めとして、澤山の人達が見神とか見佛とかといふ實驗を披瀝したものである。今日ではさうしたことをあまり聞かないが、かうした實驗は苟も道に志す者にはきつとあることなのであります。

經文に佛とあるのは自覺者のことであり、得道者のことである。その佛を唯一と記さないで、諸佛と記してある所に深い味ひがある。それから又、佛を過去とも未來とも記さないで現在として記してある所にも深い味ひがあるのであります。

三。

佛は世の中に、たつた一人しか現存することがないといふ具合に考

へたのは、世に所謂小乗佛教徒と稱せらるる所の原始佛教教團の人達である。彼等は、佛というたら釋尊一人のことであつて、菩薩といつたら彌勒菩薩一人のことであると考へてゐた。かうした考の人達が佛を見るといふのは一人の佛を見るといふことになる。キリスト教徒がキリストただ一人を救主と仰ぐのとよく似てゐる。これに反して大乘佛教徒は、諸々の佛といふ考をもつてゐる。彼等は、佛は釋尊一人ではない無量に佛が存在してゐると信じてゐる。小乗佛教徒でも系統的に、三世に亙りて諸佛といふことは認めてゐる。然し、現在の佛としては、釋尊一人を認めるのみである。

大乘佛教徒は、三世に亙つて諸々の佛を認むるのみならず、現在において無量の佛菩薩を認むるのである。大乘佛典では佛の數がガンヂ

ス河の砂の數程あると説いてゐる。自覺者は世の中にたつた一人あるのではない無限にあるのである。

『中陰經』の中に「一佛出世して法界を觀見すれば、草木國土悉く皆成佛す。」といふ言葉がある。『涅槃經』の中には「奇なるかな、奇なるかな、一切衆生に如來の智慧德相を備ふ。」といふ言葉がある。『華嚴經』を讀むと、三千大千世界の草木國土がすべて佛であり菩薩であることが詳細に記されてゐる。是等の大乘佛典の中心思想は、一人の佛の世界ではなくて多佛の世界である。此點で小乗佛教は一神教的であつて、大乘佛教は多神教的である。眞宗教團の御都合的信仰者が、客觀的の彌陀一佛に歸依するが如きは大乘佛教から小乗佛教に逆轉したのである。ユダヤ教徒が唯一神エホバを禮拜するやうに唯一神の阿彌

陀佛を禮拜するやうなキリスト教的の佛教もあるやうである。唯一神の阿彌陀佛に歸依してゐる人達が大切な寶典としてゐる。「無量壽經」に「深い定の門に住して悉く現在の無量の諸佛を觀る。」と書いてあるから面白い、尤も、彌陀一佛といふことは、諸佛の中心たる進んでいへば諸佛を見出す所の自分自身であると味ふならば、彌陀一佛に歸命するといふことは大いに意義のあることである。この一佛に歸依するといふ心から無量の諸佛が発見せらるるわけである。深い定の門に住するといふのは自分の心が阿彌陀佛の心の流れにあることである。この心から無量の諸佛が発見されるのである。この場合において、阿彌陀佛は客觀的存在ではなくして、主客未分の最初の一念である。この一念から現在の無量の諸佛を見ることが出来るのである。

四。

私達の心がいろいろのものにとらへられ束縛され混亂せられてゐるうちは、何を見ても不自由であり誰を見ても不満足である。自分の心が外物によつて攪亂せられ、傲慢になり、或は卑下慢になり、思ひ上つたり、思ひ下つたりして、眞實の自己を失うてゐるときには、人を見るとき恐れの對象となり、或は輕蔑の對象となるのである。かくして、人が無暗におそろしかつたり、人が無暗につまらなかつたりするのである。かうした人の目には佛は見えないのである。

私達が、善惡・邪正・利害等の外面的な差別相に混惑してゐる間は、眞實の人にふれることが出来ないのである。人の心の底深く流れてゐ

る生命の流れには、自ら深く沈潜してゐる生命それ自身でなければ觸れることは出来ないのである。ちやうど、ほこりのある水の表面を掻き分けてその底にひそめる清水にふるるやうに、私達は外面的な雑音の塵埃をとりつけて深い心の底に沈むときに、一切人の心の底に湧いてゐる尊い命にふれることが出来るのである。

私はこの度母を失うて深い悲しみに沈み、何事も手につかず、静に母の御骨の側に坐つてゐました。この心は一面世の中のすべての人に離れすべてのことに叛いてゐる相である。この間にどんな人が招いても行かず、どんなことがあつてもこの室をはなれることならば何事もする氣にはなれなかつた。いはば暗い心であらねばならぬ。所が私は涙の中に沈んでゐつつ、決して暗い心にはなつてゐなかつた。天皇が

崩御になると諒闇といひます。これは世の中が暗いといふことであります。日光の如く大切な人が往つた後は暗い感じをうけるのは勿論であります。然し眞に往ける人を追慕する心は決して暗いものではありません。私は母を失うて慟哭した。忌中は殆んど涙に目が曇つてゐた。然しそれは暗い氣持では決してないのである。涙ながらに私は御骨や寫眞ををがんでゐる、そして深い悲しみに沈んでゐる。然し私は何等の惑もまたぬ、何等の迷もまたぬ、心はいたつて静である。外界から来るいろいろの刺戟に對して、異常な強さをもつてゐる。或友人が忌中に私の所を訪ねてきて、御骨の前に造花やら生花やら果物やら菓子やら澤山にささげ、燈明を上げ、香を焚いてゐる有様を見て、佛様を見るよりも雛壇を見るやうな感じだというた。この人に君が思うてゐ

る佛様とはどういふものであるかといふと、寂しい冷やかなものだといふ。雛壇はどういふものかといふと、生氣のあるにぎやかなものだというた。私はこの友人にそれではこの中陰壇は君のいふ通りに雛壇であるというた。母の御骨の前に供へてある生花・造花・果物・菓子・蠟燭・線香・拈香・沈木その他いろいろのものがみな私の友人達からささげて下さつたので、私はその一々の上に友人の姿を見てゐるのである。それで一人の愛する母の御骨と共に、多くの愛する友の心もいろいろの形をなして竝んでゐるのである。それで淋しい心の内から、にぎやかなものを味うてゐる。私は母を慕うて泣いてゐる内に、多くの友人の愛にふれて泣いてゐるのである。かくて、私は一人の母の愛にひたる心から、多くの友の愛にひたつてゐるのである。すべてに後向きに

なつてゐる形の私は、この一室にあつて而も多くの人達を抱いてゐるのである。ちやうどその心持を、お經に、深い定の門に住して悉く現在は無量の諸佛を覩る、と書かれたものであるやうに味はれるのであります。

母が往つてから、私の心は、ますます依り所のない、住り所のない、所有のない氣持になりました。かくて私の周囲の誰からも離れたやうな氣持がしました。平素からでも、所依なく、所住なく、所有なしといふことは、ほのかに味うてゐたのであります。この度、母の死によつて、この事が最も明白に感じられるやうになりました。かくて暗い心の果てに、今迄よりもつと明るい世界が見えて來たやうであります。一人の母の愛が、全世界の人の心の中に燃えたつてゐるやうに

感ぜられるやうになりました。それで私は悲しい心の中に喜を感じ、暗い心の中に光明を感じ、慟哭の中に微笑を禁じ得ないのであります。かくて、私には何等の張合のないやうな心の底から、張合を見る以上のもつと根強い命にふれ、張合を求むる以上なもつと深い所に多くの愛人を得たやうな氣が致します。

五。

私は、今、現在の無量の諸佛を見てをります。人類はみな佛です。草木國土はみな佛です。私の友人がみな佛です。母一人子一人だつた私にその母がなくなつて、血の通うてゐるものは自分一人のやうな氣がした、この一人こそ大きな一人である。而もこれが一切人である。

張合もなく、より場もないこの一人は、自分の周圍に無量の諸佛を禮拜し、讚歎することが出来るのである。かくて、私の世界は、一にして多である、寂寥にして繁榮であります。これを政體の上にとふれば、君主政治的世界ではなく共和政治的世界である。それと同時に、多數決の世界ではなくして一心專念の世界であります。靜なる心に住したとき、本當の一人ぼつちになつたとき、天地に漲る大愛にふれ、その大愛を顯現せる無限の個性にふれることが出来るのである。かくして、私は、今や、輝ける望と、根強い力とを以て新しい一步を踏み出さうとしてゐるのであります。

それは一佛の世界から多佛の世界への歩みであります。

三。誰か自由を獲得する者ぞ

一。

「我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ。」とは、敢て佛蘭西革命當時の人達ばかりの叫びではないのである。自由になりたい自由が欲しいといふことは人間本然の欲求である。この自由が妨げらるる時に、苦痛が起り、煩悶が生じ、憤怒となり、怨嗟となるのである。人間の魂は自由を欲求するといふよりも、魂は自由そのものであるとも味へよう。自由はどこにあるか、自分の内にあるか、外にあるか、自ら得べきものか、他から與へらるるものか、自由は客觀的に存在する

ものか、主觀的に存在するものか、これは主要なる問題である。私は自由は客觀的に存在するものではなくして、主觀的に存在するものであると考へてをるのである。自由と不自由といふことは、環境の上にあるのではなくして、主觀の事實であると思ふ。皇帝ネロは不自由な人であつた。奴隸エピクテタスは自由人であつた。その外形からいへば、皇帝は自由人であつて奴隸は不自由人であるかのやうであるけれど、皇帝が必ずしも自由人であるときまつてをらず、奴隸亦不自由人であるとはきまつてゐないのである。皇帝にも自由な人と不自由な人とあり、奴隸にも自由な人と不自由な人とがある。ちよつと見ると、牢獄にをる人は不自由であつて、家にをる人は自由であると思はるるけれど、決してさうにきまつてはゐない。家にて不自由の人もあり、

牢獄にゐて自由な人もあるのである。

自由といふことは、自分の欲求のままになるといふことである。だから、環境と内心とのしつくりあうた時の主観の感じが自由といはるのである。その人の主観の欲求の如何によりて自由不自由が分るのである。だから、同じ環境の下にありても、或る人には不自由であり、或る人には自由であるのである。

自由人といふ時には、その人が自分以外に、自分の意志をさまたぐる所の何物をも持たない人のことをいふのである。皇帝は自分以外に自分の意志を束縛する何物をも持たないといふことが出来るであらうか。これに反して、奴隷は自分の外に自分の意志を束縛する者を持つにきまつてゐるであらうか。ナポレオンは、我が辭書には不可能とい

ふ言葉がないといった。然るに、彼は、ウォートルローの一戦に、もうい敗け方をして、つひにはセントヘレナの孤島に死んだ。このことによつてナポレオンは不自由な人といはねばならぬであらうか、私は、ウォートルローで敗れてもセントヘレナで死んでもナポレオンは自由人であつたと思ふ。やはり、彼の辭書には不可能の語が無かつたに相異なると思ふ。エピクテタスはちんばの奴隷であつた。しかし、彼は、不自由だとは自ら思うてゐなかつた、彼はどこまでも自分の自由を享樂してをつた。いくら皇帝の位にゐても自分以外に自分を束縛するものを持つてをる者は自由人といふことが出来ない。

此處に至つて私は考へねばならぬ。自分の外に自分の意志を束縛する者を有すると有せざるとは、客觀的の差異であらうか又主觀的の差異であらうか。私はそれを主觀の差異であると思つてゐる。意志する人の意志が、人類の一員としての自己の本然にさめたる智慧の精練を経ないものであるならば、どんな環境にあつたつて自由の感じを受けすることは出来ない。

エホバは自由を有する神だらうか。誰も否とは答へまい。エホバだつてアダム・イヴの意志を束縛する自由は有しなかつた。だからというてエホバは不自由な神ではないのである。

釋迦が自由人であることは、誰も許すであらう。彼自ら自在を得てゐるといつてゐる。然し、彼だつて自分の生國カヒラバストウの没落

をどうにもすることが出来なかつた。彼はカヒラバストウの没落の日、大山を以て頭を押へられるやうな頭痛がするといつてゐた。でも釋尊はやはり自由人である。

キリストは自由人であつたことも誰も否むまい、彼は自ら神の子であると思つてゐた。然るに、彼は、ユダが自分を賣ることも、ヒラトが自分を死刑にすることもどうすることも出来なかつた。けれども彼は自由人であつた。

我等が盲目的に意志し、その意志の早く成らざるに際し不自由を感じるのである。男子が女子のやうに子を生またいといふ志望を起し、それが出来ないから不自由だと思つたり、女子が男子のやうに子を生まないでゐたいといふ志望を起したならば、彼等は人間の不自由さを

感ぜざるを得ないのである。こんな具合の志望を起す時には、どんな人だつて自由であるべき筈はない。壯健な人がどうでもして四十一度の高熱になりたいと思うたつて、それは不可能なことである。これに反して、病者が俄に壯健な人のやうに食事が進まないからというて不自由を歎ずるのも駄目なことである。何でも自分でない物をみだりに求める時我等は不自由になるのである。みだりにといふは叡智を飲んだことをいふのである。叡智の有る者は自分の意志することも盲目ではなくて明白であるのであるから、彼は自分でない物をみだりに望まない。人の物を盗んで咎められまいと望んだり、人を殺して自ら殺されまいと望んだり、男が女に成りたいと望んだり、女が男に成りたいと望んだりするやうな無謀なことは決して意志しないのである。だから、

ら、彼は不自由を感じなくてもよいのである。

孔子は「心の欲するところにしたがへども矩を踰えず。」といはれてゐます。釋尊は一切の法において自在を得たりというてをられます。これは、孔子なり釋尊なりが、心が純潔になつて、明るい智慧によつて照されたる道を行くのだから常に自由なのであることを味はせられます。

三。

かくて、私は、世の不自由を歎ずる人は何時も不自由なことばかり望んでゐる人であり、自由人とは智慧が明かにして常に自分に適當した志望のみに生きてゐる人のことだと考へずにはをられない。かくて、

不自由人とは智慧のない人であり、自由人とは智慧のある人であるといふやうに定義してもよいと思ふ。

今の世の中には、ぶらぶらしてゐて美味を喰ひ唯自分の身體の弱きを歎ずる人や、働かずして多くの金を得たいと望んでゐる人や、ろくな文章も書けないで原稿の歓迎せられざるを歎ずる人や、自ら勉めずして人の用ひざるをかこつ人などがたくさんあります。かうした人は、みな人生は不自由だといひます。誰だつて老いねばならぬ、死なねばならぬ、かうした人間界に自由は無いといふことも出来よう。然し、老ゆることと死ぬことにおいて、自ら障へられることなく静に自然の約束に従うて行き得る人は、人間が老いねばならぬ死なねばならぬといふことに何の不自由さも感じてはゐないのである。絶対に死にた

くないと望んでゐる者に、死は不自由を思はしむるであらう。然し、生れた自分は必ず死んで行くべき自然の約束なることを信知してあへて死を恐れない者にとつては、人間の死ぬるといふことは必ずしも人間の不自由さを思はしむるものではない。生死を解脱して無量壽を得るといふことは、生れないといふことでもなく、死なないといふことでもなく、生死をありのままに見てあへてそれをさげようとしなない、静な心を味ふことなのである。無量壽といふことは、生死によつて攪亂せられない所の自己を見出した心である。生死によつて攪亂せられない所の自己、それは生死を超越したる自分である。この自覺された自分には生死の束縛はないのである。かるが故に自由人であります。エヒクテタスがいうてゐる「暴君は私の首をはねることが出来よう、

然し、私の意志をうばふことは出来まい。」と。さうなんです、どんな暴君だつて、エヒクテタスは、彼の自覺してゐる自己を束縛することが出来ないと思つてゐたのである。だから、彼のやうな魂の所有者には、どんな暴君でも暴政でも、決して彼を不自由人たらしめることは出来ないのである。

ソクラテスは罪なくて國法上の罪人とせられて毒殺せられた。彼が毒をのむ日に、彼の弟子クリートーが彼を誘惑して脱牢せしめようとした。然し、彼は、國法の重んずべきことを説き、自ら不正を働くことの不可なることを説いて、靜に毒をあほいで死んだ。このソクラテスには、ミレトス、アンニウトスの彈劾も、彼を不自由人たらしめる力を有しなかつたのである。死の刹那までソクラテスはやはり自由人

であつた。

四。

これ迄、私は自由人とは明かな智慧の所有者である、自分自身の純眞な願望を發見する人であるというて來た。尙終にのぞんで、一語を加へなければならぬことがある。自由人は自分の中心の願求に向つては全生命を打込んで精進する、だから、何時迄も志願を満足出来ないといふ歎聲を發しない。常に自分の不自由を歎じ、或は人間の不自由を斷定する人達は、よい加減な志願を起し、その志願をよい加減に満足しようとして、少し骨の折れることになるともうだめであると絶望し、人生は誠に不自由な所であると斷定するのである。不自由を感じ不自由

由を斷定する人は、一面智慧に缺けた人か、或は又自分の志願に不忠實な人なのである。かくて、私は、自由人とは自己の叡智によつて自分の志願を批判し、選擇し、眞實の自己に生きる人である、さうして、何處までも自分の志願に對して底を入れない人であると思ふ。これに反して、不自由人とは、自らを照す智慧がなく、従つて客觀界を照す明し無く、ちよつとの思ひつきで盲動してゐる人のことであると思ふ。此處に私が、智慧をもつて自己の意志を批判し選擇するといふことは、善惡・邪正・因果のやうな範疇的な理智をもつてナイヴなる自分の生命を批判する事ではなくして、ナイヴなる生命それ自身が有する所の智慧によつて、生命をおほへるけがれを拂ひ去つて、生命さながらの道を選択することをいふのである。

(大正一三・四・一三)

四。衆に聞く心

一。

私たちの心には、他人の言葉を聞きたいといふ心持がある、また自分の言葉を聞いてもらひたいといふ心持もある。聞いてもらひたい心持は、語りたい心持である。語つて聞いてもらひたい心持の上に、他人と自分との融け合ひを味ふやうに、他人の言葉を聞きたいといふ心の上にも他人と自分との融け合ふ心持を味はるるやうに思ふ。

何か苦しいことでもあるとか、楽しいことでもあるときには、それを語り現はして、誰かに聞いてもらはなければ氣がすまぬものである。

それで、私たちは、自分の言葉を聞いてくれる人を常に求めてをる。私が文章を書いたり講演をしたりするのは、自分のことをきいてほしい心持からである。多くのお友達の方々から、或は手紙で、或は談話で身のうへ話を打ち明けてくれらるるのは、自分のことを私に聞いてもらひたい心からであると思ふ。私はこの聞きたい心と、聞いてもらひたい心との上について考へてをるのである。

聞いてもらひたい心即ち語りたい心の中には、單に自分の内心に燃えたつ思ひを表現するといふだけに止まらずして、自分の言ひ分に賛成をしてもらひたい心が潜んでをるやうである。それが、も一歩進むと自分の意志によつて他人を征服する心持も潜んでをるやうである。かうした心持が潜んでをるから、餘り一人が久しく語つてをると他人が

窮屈な思ひか或は退屈な思ひを起すやうになるのである。同じ言葉でも告白的な言葉は餘り人に窮屈な思ひをさせないやうであるが、説法的な言葉は窮屈な思ひを與へるやうである。語りたいたいののは伸びる心である、その自ら伸びる心が他にまで侵略してゆくときに、自分の意見を聞かして服従せしめようとするやうな具合になることがある。語りたいたい心は、ここまで進んで來ると、打ち融けようとする心が裏切られて、語るがために他と離れるやうな結果になつてくるのである。語り過ぎて人の心を害するをりなどは、きつと自分の語ることが侵略的であることを反省しなければならぬと思ふ。

釋尊は、道に進む心持を説いて、聞慧・思慧・修慧の三とせられました。第一には聞くこと、第二には考へること、第三には身にかけてやつてみることに、これによつて智慧の眼が開かれると教へてをられる。『無量壽經』をよんでをると、この「聞」といふ字が屢々出てをることになり、氣付くのである。そして、その聞といふ字が、佛の名號を聞くといふときに、多く使用せられてをるのである。「諸有衆生その名號を聞いて信心歡喜す。」と記してある言葉をみるに、佛の名を聞いて信心歡喜するといふてある。古人は、この聞と信とを一つに味うて、聞くのは即ち信するのであるといふておます。ほんたうに聞くといふことはやがて信することである。これと違つた方面から考へてみるに、私たちが或人の言葉を聞かうとする、その聞かうとする心の底には、信が潜ん

でをるのである。心の底に信がなくては、決して他の人の言葉を聞かうといふ心は起きないのである。この意味では、聞くことは信することであると同時に信するが故に聞くのであるといふことも出来るであらうと思ふ。

道を求むる者は、常にこの聞かといふことを怠つてはならない。『華嚴經』の「入法界品」に説いてある善財童子は、どうしたらば道を得られるであらうかといふことを聞くために、五十三の智識のもとをたづねて廻つた。『無量壽經』の法藏菩薩は、その師世自在王佛から二百一十億の諸佛のことを聞かれた。『涅槃經』の雪山童子は、法を聞くために、自分の全身を投げ出すことを辭せなかつた。『大般若經』の薩陀波崙は、その師曇無竭に法を聞くために、自分の手を截ることを辭せな

かつた。慧可は、達磨から法を聞くために、自分の腕を截つて投げ付けた。これらのことを味うてみると、釋尊が如何に聞くことにつとめた方であつたかといふことが味はれるのである。「無量壽經」に法藏菩薩が語つてをられるのに、「普く諸佛の法海を念じ、深を窮め、奥を盡してその涯底を究む。」というてをられるのをみるに、廣く深く聞くことに心を潜められたことがわかる。

近代人には、ともすると、聞くことを怠るやうな傾向がある。殊に、或主義の人や、或形式的信仰をつかんでをる人は、聞くことをつとめないやうである。聞くは聞いても、ひとつのことはばかりを聞いてをつて、廣い他人の心までも聞かうとはしないやうである。その宗教の法則とか、その主義の綱領とかを繰り返して聞きつつ、濫かい他人の心を

聞かうとしない人があるやうである。

自我に閉ぢこもつてをる人は、他人の言葉に耳を貸さうとしないのである。さうした人は、自分のことを語ることにのみにかかりはてて、他人の心を聞かうとしないから、いつも窮屈な小さな自我に閉ぢこもつてをるのである。

三。

私は、幼年の時分には話を聞くことが好きであつた。青年時代から本をよむことが好きであつた。今でも本をよむことが好きである。それから人の話を聞くことも好きである。私には、澤山の友達の方がいろいろ自分のことをいうて聞かしてくれられるのである。それは私が

聞くことがすきだから聞かしてくれろのだと思つてをる。これらの私の性格の上に、私が他人の心を聞かうとする熱烈な本能のあることを思はせられるのである。私には、自分の心を語りたいといふ熱烈な本能があると同時に、多くの人の心を聞きたいといふ熱烈な心もあるのである。

この頃氣付いてをることであるが、人と融け合ひたいと思ふときは、自分のありのままを腹藏なく打ち明けるといふことも大切なことであるが、心を空しうして他人の心を聞くといふことがより多く大切であるかと考へてをる。この世の一切の衆生は各々その異なる色彩をもつてをる。人間の心は到底十把ひとからげに概括するわけにはゆかない。いろいろの人がいろいろの思ひを抱いてをる。誰でも最も大切な

自分の思ひを抱いてをる。その一切衆生の思ひを敬意をもつて聞くといふことは、やがて、一切衆生の各々異なる心に對する尊敬と信順との現はれである。書物をよむにしても、單に自分の専門の書物をよむといふではなくして、時間の許す限り廣い範圍にわたつていろいろの學者の異つたる意見にふれることが大切である。多くの種類の異つた人々にあうて、それらの人々の考を謹聽するといふことも大切である。本をよむときには、その本に書いてある事件や思想よりも、それを書いてをる著者の心持を味ふことが大切である。人の話を聞いても話の題目や話の技巧などを聞かないで、それを話してをる人の心持を聞くのが大切である。本をよむにしても、他人の話聞くにしても、自分の思想をもつてこれを批判するといふ態度ではなくして、その本の著

者の心持をしつくりと味ひ、その人その人の心持にしつくりふれることが大切であると思ふ。私たちが、本氣にその人の言葉を聞くことが出来れば、その人は既に自分の中にとけこんでをるのである。一人の人の話を充分に聞き得る人は、一人の人をマスターしてをるのである。二人の人の話を充分に聞く人は、二人をマスターしてをるのである。百人の人の心を充分に聞き得る人は、百人をマスターしてをるのである。一家の人々の心を眞面目に聞くことの出来る人ならば、一家の主人たるの資格があるのである。一國の人たちの思想を眞に聞くことの出来る人は、一國の主人たる人である。この意味において、民の心を心とした帝王は、眞に一國の主となることが出来るのである。一國の君主は、萬民に自分の心を布く人ではなくして、萬民の心を自分に味

ふ人でなくてはならぬ。この點において、君主は民主的でなくてはならぬ。一切衆生の父と仰がれる佛陀は、一切衆生に對して自分の心を告げる人ではなくして、一切衆生の心をよく聞きとりて味ふ人であるのである。衆生が佛の名を聞くものであるとすれば、佛は亦衆生の心を聞く人であるのである。かくて、法を人に説くよりも、人の心を充分に聞くといふことが最も廣く自分が活きる所以であると考へる。

四。

小さい自我を固守してをる人は、他人の言葉を聞くことが出来ない。他人の言葉を聞き得るやうになるときに、自我の世界がだんだんに廣

まつてゆくのである。

私たちが他人の言葉を聞くときは、自分の思想や感情を標準にして、その間に、善とか、悪とか、正とか、邪とか、つまらぬとか、すぐれてをるとかいふ隔てをおくときには、或人の話は謹聴するが、或人の話には耳を閉づるやうになる。かうするときには、我等は一切衆生の半分の世界しかマスターすることが出来なくなるのである。勿論ここに半分といふのは、數學的に人間を二分していふのではないのである。善人のいふことは聞くが悪人の心は聞かない、盗まれる人の心は聞くが盗む者の心は聞かない、殺される人の心は聞くが殺す者の心は聞かない、貞操な人の心は聞くが淫奔の人の心は聞かないといふやうな具合であると、どうしても狭い天地に屈んでをるか、高い所にとまつて

世の中を見下してゐて、親しく萬人と觸れてゆくことが出来なくなるのである。萬人の心持をそのあるがままに聞きとつて、その上に善悪、邪正の取捨をしない人にして、始めて萬人と親しむことが出来るのである。『法華經』の上に記されてある釋尊が、聲聞も、緣覺も、みんな菩薩の道であると開會し、五逆罪を犯した提婆をも開會し、八歳の龍女の成佛をも語つてをらるるのは、やがて善悪・邪正の隔てをおかずして、一切衆生の心を味はるる廣い大きい自我の姿である。

五。

佛教の多くの經典には、道を求める人は一人の師匠の話や常聞に聞いてをるといふ態度ではなくして多くの智識を歴訪してゆく姿が記され

てある。法藏菩薩が二百一十億の諸佛のことを聞かれたのは、やがては十方衆生の心を聞かざる所以ではあるまいか。私はこの頃しきりに人の心を聞かねばならぬと思つてをる。日本人の心も、支那人の心も、印度人の心も、フランス人の心も、イギリス人の心も、アメリカ人の心も、アイヌ人や、ホツテントット人の心も聞かねばならぬと思つてをる。古いエジプトや、ギリシヤの人たちの心にもふれたい、ペルシヤや、ユダヤの人たちの心にもふれたい、古い印度や支那の人たちの心にもふれたい。老人の心も知りたい、子供の心も知りたい、學者の心も知りたい、無學者の心も知りたい、金持の心も知りたい、貧乏人の心も知りたい、健康者の心も知りたい、病弱者の心も知りたい。これらのすべての人たちの心に温かい心をもつて觸れたい、いや觸れな

くばならぬと思つてをる。自分が語るときにも、率直に自分自身を語る外に、自分の思想や感情を人に移さうとしてはならぬと思ふ。他に移さうとする心持を離れて、率直に多くの人の前に自分を語り、多くの人の心を眞面目に聞くことによつて、私は窮屈な狭い牢屋のやうな世界を解脱して、廣いゆたかな光明の世界に生れたいと念じてやまないのである。

六。

心を潜めて萬人の聲を聞くときには、そのすべての聲の中に正覺の大音が響いてをるのである。その形の上に、その色の上に、種々の姿は分れてをるが、それぞれの形、それぞれの色、そのままにしてそこ

に尊い心の燃えてをることを味ふのである。衆生の心を聞かう、萬人の心を聞かう、取捨・選擇を加へずして、ありのままに衆生の心を聞かう、さうして衆生と共に泣き、衆生と共に笑ひ、衆生の怒る心に同じ、衆生の憎む心にも同じ、衆生の愛する心にも同じ、しかも、その何れの一つにも執着せず、或者の味方となつて或者の敵とならず、敵である人の心をも知り、味方である人の心をも知り、双方の心をしんみりと聞きとるやうでありたいと思つてをる。かうした廣いことを漠然と望んでをるに止まらず、實際の生活の上に餘り自己を主張することをつとめないで、他人の心持を眞面目に聞きとるやうでありたいと念じてをるのである。庚申塚の猿は、見まい、聞まい、喋るまいとしてをります。これに反して、私は、廣く見よう、廣く聞かう、眞面

目に語らうと思つてをる。見ねばならぬ、聞かねばならぬ、語らねばならぬ。眼をひらき、耳をひらき、充分に他人を受けこむと同時に、口をひらいて明白に自分を語ることに怠つてはならぬ。しかし、他人のことを聞いて、それに模倣したり盲従したりすることは、自分の心を語つて他を征服せしめようとすると同じ愚かさであると思ふ。自分ほどこまでも純な自分を失はず、他によつて侵されず、移されないやうでなければならぬ。かくいふことは、いつまでも自分はかやうな自分であると固守して成長を心がけないことであると誤解してはならぬのである。多くの人の心を聞けば、自然に自分の内容が擴大されてくる、そこに現はるる純一な自分は、廣く聞かなかつたときの自分と異つた形になるのは勿論のことである。

廣く萬人の心を聞かう、民衆の中にはいらう、妥協をさけ、征服をさけ、民衆の聲を聞き、民衆の中に叫ばう。(大正一三・六・六)

五。豫想到裏切られたる時

A。あなたは豫想到裏切られるといふやうな場合に如何な氣持になりますか。

B。あなたの尋ねてをられるその豫想到裏切られるといふことを事實の上で一ついつて見て下さいませんか。

A。近い所で申しますならば、あなたなどはあちこちお歩きになりますが、或所へ行く時に、其所ではかういふ具合に待遇してくれるだらうとか、こんな具合の準備をして迎へてくれるだらうとかいふ豫想を持つておいでになる場合、愈々となつて其處に行つて見ると、豫想

に反するやうな待遇を受けるやうな場合にあなたは如何なさいますか。

B。私たちの豫想はそのままに來ることもあればその外れる場合もあります。昔から當て事と越中禪は向ふから外れるといふことがあるやうに、豫想は豫想の如く實現せられることは珍らしいことと思はねばなりません。尤も、豫想そのものが餘りに事實に遠ざかつた都合の好い空想であるならば外れる場合が多いのである。よく落着いて考へた上に出來上つた豫想でも、愈々その場合に臨むと裏切られる場合は多いのである。たとへば、自分を待遇して貰ふといふやうな場合において、豫想以上の厚遇をされる場合と豫想以下の冷遇をされる場合とがあるやうであります。

A。さうした場合にあなたは如何やうにお感じになりますか。

B。豫想以上に厚遇せられる時にもちよつと底氣味の悪いやうな氣がする。豫想以下の冷遇をされる場合にはちよつと癪にも障るのであります。

A。その時には如何なさいますか……。

B。私は、そんな場合にちつと考へてをります。先づ第一に意識的に又は無意識的に自分の考へてをつた豫想が必ずしもさうなつて來るに決つてゐないことを發見します。つまり第一に自分の豫想それ自身を檢查して見るのです。次には或は厚遇或は冷遇と自分が感じてをることについて靜な心をもつて檢查して見るのです。さうして、何れの場合においても私は最初の一念をば失はないやうに心懸けてをるので

あります。

B。諺に、いつも柳の下には鱒がをらぬといふことがあります。私たちは自分の都合の好いことを期待するやうな癖があります。或時に自分の都合のよいことがあると、何時でもそれがあるやうに當てにしてをることがあります。豫想するといふことは期待することであり又當てにすることがあります。だから、一種の理想主義です。いつも變つてをる世の中に、變つてをる人の中に、いつも同じことばかり起つて來ると考へることが抑々の間違であります。だから、根柢において生活の前途に豫想を作つたり期待を持つたり當て事としたり或理想を持つたりすることが、諸行無常の眞理・眞實相に對して間違つてをることだと思ひます。だから、私は生活の上において豫想や期待やを持

たないやうにしたいと思つてをります。人の家に行くについても、何等の豫想を持たないで行きたいと思ひます。そして、そこに現はれて來る新しい事象に對して驚異を感じて行きたいと思つてをります。人に會ふにも、豫めこの人はこんな人であらうとかかういふ具合にしてくれるだらうとかいふ期待を持たないで會ひたいと思つてをります。私たちは、勝手に豫想や期待を作つて、あの人は思つたやうな人になかつたといつたり、あの家は思つたやうな家ではないといつたりしてをることがある。自分が勝手に豫想を作つておいて、現實がさうでない場合に自分の豫想を恥づればよいのに、それを恥ぢもしないで現實を非難するやうな場合が間々あります。これは責むべきことではないと思ひます。豫想に裏切られる憾みは豫想を持つたといふことの相當



に受くべき罰だと思ひます。私は、豫想についてこんなに考へてをるのですが、でも、いつの間にもやら無意識的に或豫想を作つて事に當ると見えて、何時も諺にある米河豚の岩に突き當つたやうな驚きや怒りやに沈むことがあるのです。さうした場合は私はいろいろと考へさせられるのであります。

A。何か一つ實例を出して聴かして下さいませんか。

B。先年かういふことがありました。或夏に私の友人たちが發起してやつてをる夏季講習會に招かれたことがあります。その場合に、私は、『無量壽經』の話を三日間語りました。最後の日の茶話會に、會員の人たちが、こんな話をもつと續いて聴きたいから來年もこの會に來て貰ひたいといふのです。その時、私は、これまでこの會は毎年違つ

た講師を招かれるやうであるのに私だけ二年も續くとよくないことはありませんかと聞きました。いや差支へはありませぬ是非來年も來て欲しいといふので、では來年の何月何日頃來ることに今から約束しておきませうというて別れました。さて、來年になつて會の開かれる二ヶ月も前になつても何の音沙汰もない、講題も尋ねて來ない。もう一ヶ月前になつて來ても何の音沙汰もない。どうしたのかと案じ出した。然し、その會の世話をしてをる私の友人は、學生時代から几帳面な男で決して無責任なことをしない人だつたが、去年の一諾を重んじて別していうて來ないのだらうと思つてゐた。愈々會の十日程前に私から其處に着する時間と講題とを通知した。すると電報で一日の日延を乞うて來た。昨年あれ程決めておいたのにどうしたのかと思つたが、世

の中の事は變化して行くのだから何かの都合があるのだらうと思つて私の用事を差し換へてその日の事を承諾してやつた。愈々その日になつて其處に着くと友人は何となく落着かぬ顔をして私を迎へてくれた。道に貼り出してある廣告ビラがそれとなく自分の眼に入つた。講師の名の所に私の名が記してなくて他の知人の名が記してある、妙なと思ひつつ會場についた。會の入口には、その人の名が記された後から書いたららしい様子に私の名も書いてある。私は變に思つた。招ぜられるままに客室にはいると、私より以前に知人であるその人が來てゐた。その人も私の姿を見て或豫想が裏切られたやうな顔をした。私は黙つて其處に坐ると友人は氣の毒さうに事情を話した。その言ひ分を聴くとかうなのである。

彼は昨年私に約束したことをすつかり忘れてしまつた。そして今年の春ここにゐる所の私の知人に講師を依頼した。會の間近になつた時に私の通知が行つたので去年の約束をはつきり思ひ出した。

其處で友人は随分困つた。私に斷る面目も無し、本年になつて頼んだ知人に斷る面目もなし、いろいろ惱んだ結果二人に講話をして貰ふことに決したから、どうぞ悪からず思うてくれといふのである。これを聞いて私はちよつと憤つとした。第一に約束を忘れた友人を責むる心も起きた。忙しい自分はこの暑中をわざわざ遠方まで來たのだから、若しそんなのなら斷つてくれたらよかつたのにと思つた。それでそのまま辭して歸らうかと思つた。先に來てゐた知人も、妙に感じたらしく幸ひ私は他に用事もあるから辭して歸ると申し出ました。その知人

の心持も私には能く吞めました。私は靜に考へて見た。友人の忘れてゐたことは、無責任だと責めることも出来るが、人間には物忘れをするといふやうな場合もないとはいはれぬ、今の場合さう深く彼を咎めてゐたつて仕方がない。この豫想の裏切りに對してそのままにして辭し去るといふことは果して自分の道であらうかと考へて見た。その時私はかう考へた。昨年の夏私が約束したその日から今日此處に来て講演をする念願を持つてゐた。その念願の通りに此處へ來たわけである。友人は私との約束を忘れたものだから、その罰にいろいろ苦しんだ。然し、彼は私の念願を尙び彼自身のその時の念願を尙んで私を招くことにしたのである。だから、私は傍眼を振らずに最初の一念通りにここで三日間自分の所信を語らうと決した。さうして、辭し去らうとす

る知人に對しても、去つてはいけないというて兎に角二人共此處において自分の語らうと思つたことを語らうと決めたのである。

A。そんな場合には、私だつたら直ぐに歸つてしまひます。大體その人が前の年に約束してそれを忘れる位なら、あなたの話を聴きたいといふ誠意がなかつたと見られるではありませんか。さうした誠意のない人が、唯あなたへの義理立てにあなたに話をして貰ふことにしたと見るより外にないではないですか。そんな人たちに話をしてゐるより潔く黙つて歸ることは、より以上の話を彼等に對してすることになるではありませんか。

B。そんなにも考へて見ました。それで、餘程そのまま歸らうかと思ひましたが、向ふが誠意があらうが無からうが、既に昨年、來年も

来て下さいといった時に、私は彼等の上に誠意を認めて来ることに決心したのである。だから、後から彼等の誠意がどう裏切られても、私は何處迄も彼等の誠意を信じ抜かう、さうして、私の初一念を貫徹しようとして決心しているいろいろの嫌な感情を奥歯に噛み潰してしまつたのであります。

A。さうした場合あなたは巧利的な考は起きなかつたのですか。

B。巧利的な考といふと。

A。このままに歸つたら、旅費も貰へないし謝禮も貰へない。暫く堪へてさへをればそれを貰へるからといふやうな考は起きて來なかつたのですか。

B。やはり、そんな考も心の一部分から首を擡げて來るものですね。

でも、私はそんな巧利的な損得の上でものを堪へるといふことは出來ないので。

A。あなたは實際は巧利的なのであるが、それに對して價值的判断を加へて、そんな心で動くことを恥とし、そこへ最初の一念を通すなどといふよい名を見出して、その實は巧利的な舉動をやつたのではありませぬか。

B。随分際どく突つ込んで來ますね。私もさうでないかと反省して見たのです。あなたのいふやうなことがないともいへませぬ。私たちが、その實、或卑しい心で動いてゐるのに、言ひ前を誰の前にも出せるやうなことに苦心するといふやうなことが間々あるのです。私たちは、さうした卑劣な行ひをしたくないと思つてをります。

A。それはさうでせう。その場合はあなたが語らうと思つて行かれた通りに語らしめるやうな仕組が出来てゐたからいいのであるが、あなたが約束した時に其處へ行つて、其處には何等の準備もしてないといふことに出會はれたことはないですか。

B。折々あります。

A。そんな場合に、あなたは、どうされましたか。

B。どうするといつて、さうしたことを決めてはをりません。或場合こんな事をしたといふことを一つ聽いて貰ひます。

A。聽かして貰ひます。

B。私が、或年の冬、私の宅からは三十里ばかりも隔たつた所へ約束を守つて行つたのであります。その着驛に着いても誰も迎へに來て

ゐない。靴はあるし、赤帽のあるやうな所ではない。野路で車も通らないし、雪は積んでをり、ちよつと困つた。そのまま歸らうかと思つたが、然し、此處まで來たんだからその事情でも聞かうと思つて、酷い目に遭つて驛から一里ばかりもあるその人の家に着いた。着いて見るとその人はゐない。講演會のありさうな様子もない。妻君は怪訝な顔をして玄關へ出て來る。だんだん聞いて見ると、向ふは舊曆の日で約束した心算でをり、私は新曆の日で約束した心算であつた。齟齬が出来たのだとわかつた。さうなると誰も咎める氣にはなれない。一種のをかしさもある。私は、そのまま其處を辭して二日ばかり、作つたこの時間をどういふ風に暮さうかと考へて見た。丁度其處から程遠からぬ所に私の好きな宿屋があつたから、汽車に乗つてその宿屋に

行き其處で二日間静にものを書いたことがある。その時に出来た文章で今も氣持よく讀まれるものも残つてをります。

A。あなたは、怒つて歸つたやうなことはありませんか。

B。怒つたといふではないけれど、こんな場合がありました。或日は約を守つて講演會に出席しようと思つて汽車に乗つて或驛に下車した。誰か迎への人が出来てをるだらうと思つたが、誰も来てゐない。會は知つてをるが會場が何處かわからなかつたので、その日はその町の親類を訪ねて一日語つて來た。後で聞くと、その會では私の來るのを待ちに待つてゐたといふことでした。何でも迎へに出る筈であつた人が、時間を間違へて來なかつたといふことです。私は、こんな豫想到に反するやうな場合には心機一轉といふことが大切なことだと思ひま

す。

A。心機一轉とは一體どんなことですか。

B。事を爲さうとしてそれが出来ないことになつた時に、その事にばかりめそめそとこだはつてをらないで、其處に新しい道を求めて自ら生きて行くといふことを私は常に心懸けてをります。主觀と客觀との對立の上において、主觀の前に客觀が整うて來る場合は、何處までも主觀の前に進めばよいのだが、若し客觀が整うてゐない場合には、先づそれを整へることに努力し、若しそれが整へることが出来ないと思つて見當がついたら、他の新しい客觀に主觀を燃え移らしめて行くことが大切だと思つてをります。

A。客觀を整へるといふのはどういふことをするのですか。

B。たとへば、私が或所へ行くとしますね、すると、その家族などが私が豫想した程に私を愛してくれないといふやうな場合にです、私は早速それを捨て去るといふやうなことをせずして、じつと其處に落着いて、彼等が私を了解してくれるまで彼等の心を育てたいといふやうな心になります。いはば、居据り強盜式なんです。敵に後を見せないで辛抱強く敵の陥落を迫るといふ風に進むのです。それは道理的に私をかうしてくれといふのではなくして、こちらが懐しう思うてをるならば、その心のままに向ふに頓着なしにこちらが懐しんで行くのです。

A。心機一轉とはそんなことなのですか。

B。一言にしていへば、毀れた茶碗を何時までもつぎ合はして見て

ゐないで、新しい茶碗を求めすることに努力するといふことです。たとへば、何か一つ自分の目的を立ててしようとする場合に、自分の體が病氣になる、初めにはその病氣をよくなほして元の目的を達しようと努力する、然し、その病氣が痼疾になつて自分の元の志をやるに堪へないやうな場合があるとする、さうした場合に、何時までも困る困るというてゐないで初志を一變してその肉體をもつて出来る事に向ふべきであると思ひます。或醫者が失明した、初めはそれを歎いてゐた、その内彼は按摩になつた、これらは心機一轉である。西行や芭蕉があした生活をやつたのも心機一轉の結果である。昔から此處ばかりに日が照るまいしといふ諺がある。客觀的に行き詰つた場合に、何時までもそれに執着してゐないで心の方向を一轉して新しい道に生きるこ

とに努めなくてはならぬと思ふ。自分は軍人になつて働かうと思つてゐた人が怪我をして脚を一本折つたとする、もうさうなると戦場に馳驅する所の軍人にはなれない。彼はそれを何時までも果敢なんであつてはならない。その一本の脚をもつて行かれる道を選ばねばならぬ。軍事上の事が好きならば頭腦の上でそれを考へるも好からう、でなければ、他に何處かに自分の魂の噴火口を求めると思ふ。かういふことを私は心機一轉といふのであります。外へ出ようとする蠅が、障子に飛び着いてばかりゐて、後の方から逃げて行く道のあることを知らんでをる愚かさを私共は折々やつてをるのである。かうした場合、一面ばかりを見ないで全面を見廻すといふことによつて、我々の進路のあることを思はねばならぬ。私たちは或所に到達しようと思ふ、そ

の心の道は一つある、その一つの道を実際に擇ぶには無限の道がある、具體的の道が一つ塞がつても他に幾等でも自分の志を遂げる道のあることを思はねばならぬ。單にあり觸れた汽車道ばかり頼らなければ先方に行くことが出来ないと思つてゐてはならない。東京から京都へ行くに、東海道を過ぎても行けるし、北陸道を過ぎても行けるし、それから、東北、北海道、西比利亚を過ぎてても京都に行かれることを思はねばならぬ。地の上にも道があり、地の下にも道があり、空中にも道があることを思はねばならぬ。旅順の攻圍の時には、地上にのみ道があつて地下にも道があり空中にも道があることを知らなれたからあんなに人命を損したのだと或軍人が話してゐた。南の方へ行くには南に向うて行く道があるばかりでなしに、北に向うて行つて南へ到着する

道もあることを思はねばならぬ。だから、苟も自分の魂の道を行くものは、一方のみを見てゐないで全體を見廻すといふことが大切であります。其處に心機一轉の心があります。此處に注意すべきことは、自分の魂の道を求めないで何時も外界に支配され反射的に動いてをるやうな人のことは採るに足らない。かういふ人には決して私のいふ心機一轉といふことはないといふことを思うて貰ひたい。(大正十三年七月)

六。寂 寥

一。

彼は性來の寂しがりやである。彼に兄弟のないことや、彼の父親が早く死んだといふことは、彼を寂しがりやにならしめたとは思はれない。彼は生れたときに兩親始め澤山の人達を悦ばした。さうして澤山の人から大切に愛せられて大きくなつた。彼の家は物において富んではゐなかつたけれども、彼は愛において常に豊かな富を持つてをつた。しかし彼はその間にあつても常に寂しく暮してゐた。彼は子供の時分から友達と一緒になつて騒ぐことばかりを好んでゐなかつた。友達と

一緒になつて騒いでをるうちに、直ぐに寂しさを感じ出した。彼は友達の群を離れて、ひとり静かにしてをることが度々あつた。しかしさうしてゐても彼は寂しかった。友達の群にはいつてゐても寂しく、ひとりゐても寂しく、どこへいつても彼は寂しい男であつた。温かい慈愛の漲つてをる母の側にゐても寂しく、そこにゐたまらずして友達の家を訪ねる、そこにも寂しさを感じて、ふとひとりで野原に出る。彼には社交性が相當にある。どちらかといへば人附合の悪い方の男ではない。しかし彼は社交界に自分を投ずることの出来ない男である。彼はをりをり廣い交りの冷たさに飽きて、ひとりで山にはいるやうな心を起す。しかし暫くひとりゐると又寂しくてたまらなくなるのである。彼が壯年のをりに、友を避けてひとりで或海岸の宿屋にいつた。そ

こに一日暮してゐると早や人が懐しくてたまらなくなつた。松原の離座敷にひとりゐることの寂寥に堪へないで、そこらに遊んでをる犬を招いて犬と物語をしてゐたこともある。もう三日も経つとたまらないやうになつて都の友の側に歸つて來た。歸つて來ても決して賑かになれない。

友達が酒宴の席などで面白く騒いでをるときに彼はひとりで寂しいのである。その寂しさを慰めようとして、友の群の中へ交らうと努力する。しかし暫くにして彼はそれにも飽きてやはりもとの寂寥にかへる。

彼には人一倍愛の深い母があつた。しかしその母の側にゐても寂しかった。彼には懐しい師匠があつた。衷心からその師匠を尊敬してを

るのであるが、その師匠の側にも寂しい。彼は相當に熱愛のある愛人を持つてゐた。しかしその愛人とゐても寂しいのである。彼は相許してをるやうな友人を持つてゐた。その友人と共にゐても寂しいのである。どこに行つても誰と會うても彼の衷心の寂しさはどうしても癒すことが出来ないのである。

嘗て彼はハウプトマンの『寂しき人々』といふ戯曲を讀んで非常に喜んだことがあつた。ヨハネスの寂しさにも、マールの寂しさにも、ケーテの寂しさにも、彼は自分を見出すことが出来た。さうして彼は念佛によつてその寂しさを癒さうとしてみた。理窟の上では念佛によつて寂しさの癒されるやうになつてをり、あるときは癒されたやうに感じたのであるが、やはりその間にあつても衷心の寂寥は常に彼を襲う

て止まないのである。

彼は寂しさを懷いて東西古今の書籍をあさつてみた。しかしどの本によつても彼の寂寥は癒されなかつた。彼は俳句を作つた、歌を詠んだ、詩を作つた、論文を書いた、講演をした。しかし何をしてみても彼の衷心の寂寥は癒されないのである。彼の講演を聞くために、多くの人が集まつて來ればそこに寂寥を感じ、來なければ亦そこに寂寥を感じるのである。

彼はどうして自分はこんなに寂しいのだらうと考へてみた。でもその理由がはつきり分らない。彼が孤獨を感じることも寂しさの一因であらう。無常を感じることも寂しさの一因であらう。どこにもをる所がない、誰にも打ち融けられないことは、彼の寂寥の原因であらう。彼

はあまり寂しいので、いろいろ變つた所に旅をしてみる。どこでも彼を受け容れてくれるのであるが、彼はそこにも寂しさを感じるのである。彼が人を訪ねて行くときに、向ふが打ち融けてくれなかつたり門前拂をされたりして寂しさに打たれることもあり、充分胸を開いて抱きよせてくれるのに對しても寂しさを禁じ得ないのである。人は自分をすつかり許して受け容れてくれない、しかし佛はすべてを許して受け容れて下さるからありがたいと佛によつて寂寥を慰めようとしてみた。けれども彼はそこにも益々ゐたまらない寂寥を感じるのである。かやうに衷心に常に寂寥を懷いてをる彼は非常に涙脆いのである。彼は、月に泣き、花に泣き、人と會うては泣き、人と別れては泣く。人から苦しめられて泣くやうなことは滅多にないけれど、彼自らが物

の哀れを感じ、涙を眼に漂はしてをることが度々あるのである。それで彼は人懐しい性を持つてをる。人もまた彼に懐しむのが多いやうである。しかし彼はこの懐しみの間にあつても堪へ切れぬやうな寂寥を感じてをるのである。

彼は、どうしたらこの寂寥が癒されるだらうかと考へてみることにが屢々ある。さうしていろいろこれを癒すことをやつてみる、暫くは紛れもするけれど、久しくは彼の寂寥を慰めることが出来ないのである。だからというて自分は永遠に寂しい男なのであると寂寥に腰を据ゑることも出来ない、それで奥にはしつとりとした寂寥の心を懷きながら、外面には賑かさうにはつしやいでみることもあるのである。彼の知人は彼を賑かな人だと思つてをるのが多いやうである。少数の人は彼の

寂しい心に觸れてをるやうである。彼は自らこの寂しい心を持ってあましてをる。世の中は寂しいものだと言つてもをられず、自分は寂しい性分を持つてをるのだと決めてもをられず、やはりやるせない思になつて變つた所と變つた人とを求めて歩くのである。さうして、どこにいつても落着く所もなく、誰に會うても衷心から賑かになることもなく、いつも森閑とした心持にかへつて來るのである。かうした心持をもつてをる彼は、芭蕉翁などの俳句の上に表現した寂しみといふやうなことに胸の高鳴りを禁じ得ないのである。しかし芭蕉翁が寂しさにしつとりとひたつてゐたやうに、彼にはそれにひたつてをることも出來ないのである。

たださへ寂しい彼は、正月に母をこの世から送り出してから、殊更

その寂しさを深く味ふやうになつた。何をしてゐても、何をいうてゐても、彼の心にはいつも寂しい思が湧いてをる。離れ行く人の心にも寂しい涙をこぼし、隨いて來る人の心にも寂しい涙をこぼし、人の群に投じて寂しさを癒す元氣もなく、ひとりで寂しさを守る元氣もなく、心から愛するものの愛の懷にゐながら一層の寂しさを禁じ得ないのである。本年の春の花も寂しかった。夏の繁りも寂しかった。殊更秋風が吹きそめてからただ寂しさがしんしんと打ち寄せて來るのである。今夜は十五夜である。月は雲に隠れて見えぬ。蟲は靜かに鳴いてをる。何もかも寂しさに彩られてをるのである。(大正一三・九・一三夜)

彼がまだ年若い頃のことであつた、今から二十五年前、彼がまた京都の學校にゐた頃のことであつた。京都の東本願寺で、蓮如上人の四百回忌の法事が勤まつた。そのをりに、本願寺の門内で奏せられた舞樂の大太鼓の音を、この頃になつて彼はしきりに思ひ出されるのである。白い砂利を敷き詰めた門内に、朱塗の欄干で取り巻いた樂堂が建てられてあつた。その真中に大太鼓が据ゑられてあつた。舞樂の装束を着た伶人がその太鼓の下に立つと小さく見える程に太鼓は大きかつた。或時を隔ててドーンと打ち、ドーンと打つのであつた。そのドーンの響が群衆に埋められたやうな庭一面に響き渡るのであつた。單調といへばこんな單調な音樂はあるまい。調子の低い、太い音が廣場の全體に靜かに波打つて行くときに、群衆はいつの間にもやら靜まりか

へるのであつた。彼は、この頃しきりにこの寂しい太鼓の音、この寂しさの間に、賑かさのある太鼓の音をしきりに偲んでをるのである。西洋音樂のオーケストラを聞き、團平の弾いた義太夫のさはりを聞いた彼の耳に、この頃になつて新しく聞えて來るのが二十幾年前に聞いた單調といへば至極單調なあの舞樂の大太鼓の音である。何の技巧もなく、複雑な音階も持たないところの、あのドーンと響く大太鼓の音、寂寥の境地にある彼の魂は、二十五年前に聞いたあの太鼓の音を聞き出さずにはをれなかつたのである。

古池や蛙飛びこむ水の音

といふ芭蕉の句がある。嘗て正岡子規氏は、この句を駄句だと貶しめてゐたやうである。私たちもそんなに思うてゐたのだが、舞樂の大太鼓

の音に憧れる彼には、古池に蛙の飛びこむところの水の音が無暗になつかしく思はるのである。四面が生え茂つた叢でおほはれてをる小さな池、その池のぐるりに一人立つてをる。風はそよとだに吹いてをらぬ。鳥の聲も聞えぬ。かかるをりに草の葉から不意に小さな蛙が池に飛びこんだ。さわがしい雑音の中には聞くことの出来ない水の音が、静かに澄みきつてをるものの耳にはよく響いて來るのである。さわがしい心には聞くことの出来ない小さな水の音、何等の色彩もなく、屈折のない、單なるドボンといふ小さな音を聞く芭蕉の心持がなつかしく思はれてならぬのである。古池に蛙の飛びこむ水の音を聞き出すところの耳を持つ芭蕉は、寂しい男であつたに違ひないと思はずにはおられない。雑音に心をみだされてをる人には、何等の響をも感ぜしめ

ない低い水の音が、寂寥によつて満たされてをる芭蕉の耳には、強い響を與へたものと思はれる。古池に蛙の飛びこむ水の音は、やがて静かな芭蕉の心に蛙の飛びこむ心の響であるやうに思はれるのである。どの音楽でも、音楽は大抵寂寥な心から溢れ出る音である。彼はベートベンの曲を愛してをる。ベートベンの『月光の曲』を聞いて、ベートベンが如何に寂しい魂を持つた人であつたかを思はずにはおられないのである。彼の拵へた多くの曲にびつくりするやうな亂調子の混つて來るのを聞いて、彼のやるせない魂を思はぬものはあるまい。寂しい心をいただき、その寂しい心に落着いておられないやるせなさど躍動とを思はずにはおられないのである。

彼の身に行ふこと、口にいふことには、ときに突拍子のことがあり、

亂調子の姿がある。心のない人は彼の生活の不調和と拍子はづれを非難するのであるが、彼にはそれを知りつつどうすることの出来ぬやるせないものがあるのである。寂寥な魂を持つてをる彼はかうした亂調子と突拍子によつて漸く生活に息づくのである。かかる一面をみて、彼を賑かなる男たと誤解する人もあるらしい。表面賑かにはつしやいでをる彼の心の底には、じめじめと涙の濕うてをるのを知る人は妙いやうである。それを思うて、彼の寂しさは又その色を加へて來る場合があるのである。

ただ、大きな宇宙の中にドーンと響くあの舞樂の太鼓の音、寂しがりやの彼は、あの太鼓の音の靜かなリズムを切に念じてをるのである。

三。

一人も自分の衷心を知つてくれるものがないといふことは寂しいことである。孤獨は寂寥を呼ぶのである。

十二使徒を始め多くの隨喜者を持つてゐたキリストが、最後の晩餐のをりに、一人も自分に従ふものがないと思つたときに、どんなに寂しかったらう。彼は、その寂しさに堪へやらで神に祈つた。その最後に祈つた神さへも、最後に消え去つて、彼の心に大暗黒が閉され、エリ、エリ、ラマサバクタニと叫んだをりに、最早神も自分を捨てさつた最も深い孤獨の底を味うたのである。キリストの死は寂しい魂の姿を見せつけてくれるのである。

ソクラテスが毒杯を傾けるさきに態々彼の弟子クリトンが彼の牢獄を訪うて、脱獄をすすめたをりのあの問答をよんで、ソクラテスの寂しい心に觸れないものはあるまい。

常に萬二千人または千二百人の弟子たちに圍まれてゐた釋尊、大國の王にあがめられてゐた釋尊、あの釋尊の魂は賑かであつたらうか。『華嚴經』に現はれた毘盧遮那佛は、如何にも賑かな山川國土の佛にとりまかれた佛のやうである。しかし深く毘盧遮那佛の心を思ふときに、靜かな寂しい流れに觸れずにはゐられないのである。『無量壽經』に説かれてある阿彌陀佛の姿を思ふときに、どうしてその寂しい心に觸れずををられよう。「十方衆生至心信樂して我が國に生れんと欲ひ乃至十念せんもの若し生れずば正覺をとらじ。」と願うた阿彌陀佛は、やるせ

ない寂しい心を持つた人でなくて何であらう。善惡を問ふ暇もなく、邪正を論ずるゆとりもなく、十方衆生を無條件に抱き寄せようとする心は、阿彌陀佛の大慈である。その大慈は孤獨の中に湧いてをる大悲である。

『法華經』の釋尊は、聲聞を開會し、緣覺を開會し、提婆を抱き、龍女の手を取らうとしてをる。自分の心を了解しない弟子でも、自分に敵對する提婆でも、修行の妨げとして痛く斥けた女性でも、今は遠く離れてをることの出来ないのが釋尊の寂しい心であつたらしい。寂しい心の込み上げて來るときには、了解があるとかないとか、善だとか悪だとか、敵だとか味方だとかいふことを考へてはゐられなくなつて來る。一握の藁にもその寂しい心を託さうとするのである。

三界の中に住むところのないほどに孤獨な魂、三千世界に身の置き所のないほどに寂寥な魂は、一切衆生に泣きよらずにはゐられないのである。寂しい心を持つてをる彼は、孤獨を感じると同時に、孤獨に收まつてゐられない心をもつて萬人に縋らうとする。寂寥な彼の魂は、孤獨に收まつてをることが出来ないで、孤獨の魂を破らうと努力してをる。そしてその努力の中から、自分の孤獨を見出して、以前にも増した寂寥の淵に沈むのである。縋らうとする自分を見るときに、自分を脱けて行く萬人を見るので、彼の寂しい魂は、遂に涙となつて破裂せずにはゐられなくなつて来る。さうして彼は「十方衆生よ至心信樂して我國に生れんと欲へ。」と叫ばずにはゐられなくなつて来る。この叫びの中には熱い涙がしみ出てをるのである。

昨夕の雨は今朝になつて霽れた。百姓たちは、殆ど家を明けて田を刈りに出てをる。村の午後は静かである。その静かさの中に張り切れるやうな聲で蟬が鳴いてをる。あの蟬もやはり寂しいのだらう。寂しい心でなくて、どうしてあんなに強い叫びが出よう。元氣のよい蟬の聲を聞きながら彼は寂しさに堪へられぬ心で、この文を記したのである。(大正一三・九・一六書)

七。哀 愁

一。

古人が、人間到る處愁歎の聲を聞くというたり、南隣にも哭し北里にも哭すというたことを、この頃しみじみ想ひ出させられてゐます。遇ふ人も遇ふ人も皆せつない思を打ち明け、苦しい運命を泣くのです。人生には楽しみも喜びもあることは確である。しかし悲しみも苦みもあることも亦確である。私のそばに寄つてくる人達の多くは喜びと楽しみをあまり傳へてくれませぬ。悲みと苦みを傳へてくる人が多いのであります。私はをりをり自分は人の苦みや悲みを聞きたさうな顔をして

をるのかなあと思ふこともあります。私自身がいつも胸に悲みを抱いてをるので、それで悲みを抱いてをる友達がよつてくるのかもしれないと思つてゐます。

しかし、さうしたお友達の中には、嘗て悲しい境地にゐたり苦しんでゐたときに足も運び交通もしてゐながら、一度意を得てやや明るい生活にはいるやうになると、一向足も運んで來ず交通もしないやうになり、はては路傍の人のやうになるものもをりをりあるのであります。或人は、むづかしい父がゐたためにいつも苦しんだ。その苦しい胸を訴へるためにをりをり訪ねて來たのに、あとからその父が死んで自分の天下になると、一向交通もしないやうになつたのがある。

或人は、自分に苦しい問題が差迫つてゐたときにうるさいと思ふほ

と訪ねて来たが、その問題が片付いてしまふと、けろりとしてそんなことがあつたかといふやうな顔をしてをる。

或人は、學生の時代にいろいろのことに困つて訪ねて来たが、學校を出て社會において相當の地位を得るやうになると、そんなことがあつたかといふやうな顔をしてをるものもある。

尤も、人間の交際はそのときそのときの場合で變遷してゆくものである。だから、或場合には親しくしてゐた友人も終には疎くなることもある。疎くなつてゐた友人も亦親しくなることもあるのであります。だから、友人の來るときも、去るときも、あまり多くの感動をもつことが出来なくなつてまゐります。友を得たとてあまり喜びもせず、友が去つたとてあまり悲しみも出来ないやうになつてまゐります。

友の集合離散が常でないものとしても、私の親しい友達には悲しい人が多いやうに思ひます。皆せつない胸を抱いてをる人達のやうに思ひます。しかし、同じ人でも悲しい思を抱き、せつない胸を抱いてをる間は親しくすることが出来るけれど、もうその人の胸からせつないものが去り、悲しい思ひが拭はれたときには、いつの間にもやら私の親友でなくなつて行くやうであります。

私が接する人の多くは皆涙に脆い人達であります。高い處から他人のことを裁いてをるやうな人は決して私の友となつてくれないのであります。この頃、批判といふやうな語がはやつてをりますが、それはカントがクリチイクといふ語を用ひて三つの書物をかいたそのカントの影響だともいはれませう。私はどんな意味においても批判といふ語

はあまり使ひたくありません。他人を批判することもいやであり、自分を批判することも好かないのであります。可愛い他人をどうして批判されよう。可愛い自分もどうして批判されよう。昔から愛に眼がないといひます。私は愛の動くところに批判の眼が光らなくなつてくることを感じてゐます。尤も批判といふことが至純な自分でないものうちから自分を選択する意味であるならば、批判といふことのあるのは勿論であります。ただ、私は他人の上においても、自分の上においても、善悪だとか、邪正だとか、眞偽だとかいふやうな範疇的批判を下すことが出来なくなつてをるのであります。かうした私は、誰の言ひ分を聞いても皆無理のないことのやうに思はるのであります。それは人生を肯定するといふやうな意味ではないのであつて、ただ尤も

ぢや尤もぢやといふやうな感動が起るのであります。で、私は悲しい人の悲みを聞き、苦しい人の苦みを聞くときに、共に悲しみ共に苦しむのであります。私は自分の苦しいときにそれを解脱したいと願ふやうに、他人の苦みを聞いてもどうか出来るものならば、してあげたいと思ふ心が切に起ります。金の問題に苦しんでをる人ならば金を與へて助けてあげたいと思ひ、病氣で苦しんでをる人ならば健康を與へて救うてあげたいと思ひます。戀に悩んでをる人ならばその戀を叶はせてあげたいと思ひます。その外どんな悩みを聞いてもどうにかしてあげたいと思ひます。こんなことを思ふと、私は自分の不甲斐なさを感じずにはをられないのであります。金の助けをするには私は貧乏であり、病を救ふには、私には、ラザロよ起てというたとき死んだラザロ

が甦つたやうな、キリストの力もなく、戀の問題にしる、その外いろいろの悩みを聞いても、共に悩むことは出来るが、それをどうしてあげることも出来ないであります。私自身が自分の悩みをさへどうすることも出来ないのでありますから、他人の悩みをどうにもしてあげられないのは當り前でありませう。もし、私が私自身の悩みをすつきりすることが出来るならば、他人の悩みもすつきり救ふことが出来ることと思ひます。しかし、今日の私はそれが出来ないのであります。かうしたことが亦私を悲しませてをります。

二。

私の胸は常にせつない、私の胸は常にやるせない、どんな喜びの中

にも、樂みの中にも、私には愁歎の聲が聞えるのであります。きれいな花を見てゐるときには、そんな花をみる事が出来ないで病床に悩んでをる人の上を思ひ出し、樂みのうちに悲しい思が湧いてくるのであります。面白い芝居や活動や景色を見、音樂を聞いてをるときには、さうしたことを見聞きすることが出来ないで働いてをる人のことを思ふて、やるせなさを感じずにはをられないのであります。家人と共に家にをるときには遠く離れてゐる親友のことを思ひ、遠く親友の家に在るときは家人のことを思ふ。私はどこにゐても晴々とした氣持を味ひかねてゐます。いつどこにゐても何か氣にかかることが一杯あるのであります。私はをりをり一切から離れてからつとした心持を味ふこともあります。ちやうど秋の空のやうな澄んだ心地を味ふこともあり

ます。しかし、秋雲が四方からむらがり起るやうに、私の胸にも亦またたくの間にいろいろの悩みが湧いてまわります。

私はをりをり多くの親しい友を持つことはせつない思を味はせらるることだと思つてゐます。友と語り合つてをるときは楽しいが、その楽しいうちにも別れてをる多くの友のことが偲ばれます。かくてどこにいつても落着かないやうな氣がします。私がかくやるせない心をもつてをるせいにか、私の親しい人達も皆このやるせない思を抱いてをるやうに思はれます。理窟の上から考へてみると、東方を見てをれば南方も西方も北方も見てゐられないのが當り前である。東方を見てゐながら他の方角のことを思ふのは間違つたことのやうにも思はれる。東方を見てをるときには、他方は打忘れてそこに專注してをれば、何の

悩みもないやうに思はれる。甲と乙と喧嘩をするとする、このとき、甲の方にのみ愛が傾いて乙を憎み、或は又乙の方にのみ愛が傾いて甲を憎むといふやうな單純な感情を持つことが出来るならば、決してこんなやるせない思をしないでもよいと思ひます。ところが、今日の私は、さうした簡單な感情に動いてはをられないのであります。甲も尤もだ、乙も尤もだ、甲も可愛い、乙も可愛いとなると、甲に同情しながら乙が氣にかかり、乙に同情しながら甲が氣にかかる。かうなるとどうしてもやるせない心がやまぬのであります。私の眼には常に人達の悲しい相が見えるのであります。私の耳には常に人達のせつない聲が聞えるのであります。底抜けに歌ひ騒いでをる人の相をみても、その底に流れてをる寂しい影が見えるのであります。強さうな顔をした

悩みのないかの如き人の相をみても、その底にひそめるさみしい影に涙せずをられないのであります。かくて、私は自分のうちにも悲み聞き、他人の上にも悲みをきかずにはをられないのであります。

三。

自らの悲みをどうしよう、世の悲みをどうしよう。どうかになりたい、どうかしたい。けれども、どうすることも出来ない、する力がない。だからというて人生は悲しい處だと落着けもしない。自分には悲みをどうする力もないのだと落着けもしない。やはりどうかしたい、どうかになりたい。そこに私の今日の生活があります。自分と他人と對立して考へたとき、自分さへ悲しまなければ他人はどうでもよいと思つて

もをれず、又、他人さへ苦まなければ、自分は苦しんでもよいと思つてもをられない。自分と思つてをる自分も大切であり、他人と思つてをる自分も大切である。二つ共に可愛い自分である以上は、二つ共に悲みのない、苦みのないやうにありたいといふ念願は止まないのではありません。だからというて、見るべきものを見ず、聞くべきことを聞かずして、悲しまずにをらうとも思はれない。どこまでも見極めたい、どこまでも聞き盡したい。さうして悲しいものには悲しまう、苦しいことには苦しもう。悲みや苦みを避けるために、眼を閉ぢ、耳を閉ぢることは出来ないであります。

考へてみると、私共の悲みも苦みもやるせなさも、皆執着の心から出てくるやうに思はれる。執着があるから悲しい、執着があるから苦

しい。この執着がとれたら、すつきりした心持になれよう。私はほんの閃光のやうに、私の胸に一切から解脱した軽さと廣さとを味うてはをるが、底の底から私の胸には執着がとり切れないやうな氣がするのであります。

或時は、自分と想うた自分にも離れ、他人と想うた自分にも離れて、至極あつさりした、すらりとした心持になることもあります。けれどすぐに何かに執着せずにはをられなくなつてくる。一つのこと執着が起ると、いろいろのことにも亦執着が起つてくる。すると、そこにやるせなさが生れ、悲みが生れ、惱みが生れてくる。

親しい人と別れねばならぬ、親しい人が死んで行く、自分も病む、他人も病む、佛典に四苦と説き八苦と説いてある苦みは、皆一念の愛

執から生れて來るのである。この愛執が根柢的に除かれるならば、私には苦みはあるまいと思ふ。ところが、この愛執は除かれない、寧ろこの愛執によりて生きてをるのかとも思ふ。さうなると私の生きてをることは悲しんで行くことであると思はれる。かくて、生くることは悲しいことであるといふ命題に到達するやうである。ほんたうに生くることは悲しい、生くることはせつない。かうした思に閉ぢ込められるときには、いつそ死んでしまふたらといふ心が起きぬでもない。三勝半七酒屋の段のおそのが、去年の秋の煩ひにいつそ死んでしまふたらかうした歎きもあるまいに、と歎いた詞をしみじみ思ひ出させられる。でも、私には死にきれぬ心がある。やはりこの世に對する執着がある。

自分が可愛い、他人が可愛い。どんな苦しいことがあつても、この可愛い自分をすてられないと思ふ、又どんなせつないことがあつてもこの可愛い他人を捨てられないと思ふ。

かう考へてくると、自分は悲しいことがすきであるかのやうにも思はれる、しかし、悲みはいやだ。けれど、悲みか、死か、孰れかを選択とならば、悲みはいやだけれど死ぬことは尙いやだから、悲みを解脱しなくても生きてゐたいといふことになる。若し死を選択ほどにこの世のことを思ひ切ることが出来るものならば、苦みも悲みもなくなつてしまふわけである。それが死ねないばかりに、苦しみもし悲しみもしてをるのである。そして生きながら悲しまぬやうにありたい、苦しまぬやうにありたいと、私は常に念願してをるのであります。

人生を單に客觀的事件のやうに考へてをる間はすつきりと解決がついて樂であるやうに見える。けれど、深く考へるやうになるとさう簡單にかたづけられないことを發見する。かうなると私の胸はいつも淺間山の噴火口のやうに、たえぬ惱みの烟が燃え上るのである。をりをりはこの烟が私が世に生くる力であるとも思はしめられる、又この烟によりて常に若やいで行くのだとも思はしめられる。かう考へてくると、どうしても悲しむことは生くることだといふ命題に到達するやうであります。物を簡單に解決して深い考をもたず深い疑を抱かない人には、苦みもなければ悲みもない、ただあつさりした五官の感動だけしかないやうに見えます。けれど、かかる人には悲みはないかも知れないが、生命の力は至つて弱いものであるまいか。強く生きる人にし

て始めて深い悲みを抱いて悩むものであるといふことを考へさせられるのであります。

慈悲といふ詞を考へてみると、大慈大悲の二つにわけることが出来る。私は、この頃、この大悲といふ詞が味ひのあることだと思つてゐます。大悲は大慈の母である。悲みのないものには恵みの心は湧かないと思ふ。釋尊などは、からりと晴れた胸のうちに深い悩みを抱いて常に悲しんでゐた人ではなかつたらうか。カピラ城が没落するとき、獨り木蔭にゐて、須彌山で頭を壓されるやうな氣がするという苦しみでゐられた釋尊は悲しい人ではなかつたらうか。經典を繙いて釋尊が多くの弟子達に接せらるる姿をみると、常に悲しい涙を湛へてをられたやうに思ふ。かく考へると悲しい心は尊い心であると思はしめら

れるのであります。だからというて悲しむのがほんたうだから悲しまうとつとめるやうなことも出来ない、やはり悲みから脱けたいと思ふ。かく思ひつつ亦悲みに沈む。かくしてどこまで私の生活が廻轉してゆくやらわからぬのであります。(大正一三・一〇・三、志布志にて。)

八。願 慧

一。

『無量壽經』の『三誓偈』の中に「願慧悉く成滿して、三界の雄たることを得ん。」といふ言葉があります。私はこの「願慧」といふ言葉に、大變に興味をもつてをります。願慧といへば、願と慧とに分けて考へることも出来ます。これを分けて考へれば、願は本願にして、慧は智慧であります。本願は因であり、智慧は果であると考へるときには、本願によつて智慧が生れて來るといふことになります。本願と智慧とを因と果

とに分つことは、強ちに無理とは思はれませぬ。若し、これを因果に分つとしますれば、同時の因果にして、異時の因果ではないと思ひます。本願があつて後に智慧があるといふことは、智慧が本願の結果であるといふやうに分け距てて考へるべきではなくして、本願そのものの活躍の相として智慧を見るべきであると思ひます。かく考へますと、智慧は本願の結果といふよりも、本願自身の活動といふべきものであらうと思ひます。

二。

古い時代の心理學者は、人間の精神作用を知・情・意の三つに分ちました。今日では、はつきりと知・情・意の三つに分けて人間の心理を研

究するやうな心理學者はあまり多くはなからうと思ひます。それは何故かといふに、情・意を離れた知といふやうなものもなく、知・意を離れた情といふものもなく、知・情を離れた意といふものも決してあるものではないといふことが分つて來たからであります。ところが、人間の心理の根本は知的なものであらうか情的なものであらうか意的なものであらうかといふことは、人間の心理を考へるものの前におかれたる相當に大きな問題であります。吾々が動き出すには、感情が本となるか、知識が本となるか、意志が本となるか、これは靜かに考へねばならぬ問題であります。或は一時の感情によつて盲目的に活躍する人もあります、或は冷靜なる知識によつて殆ど感情をぬきに活動する人もあります。感情によつて活動するにしろ、知識によつて活動する

にしろ、愈々それが人間の活動となつて現はるる場合には、意志の形をとることはいふまでもないことあります。そこで、人間の意志を動かすものは、感情であるか知識であるかといふ問題になつてまゐります。人間の意志が外部の刺戟を受けて動く場合には、感情によつて動くこともあり、又は知識によつて動くこともあるやうであります。或人が或人を罵倒したとする、すると罵倒せられた方が憤怒する、憤怒によつて、罵倒した人を打つことがある。かうした打たうとする意志は、憤怒といふ感情に動かされて起つたといはなければならぬ。又或人が、西しようか東しようか不分明な場合に、愈々西することが自分に利益があつて、東することが自分に不利であるといふことが分つて、斷然西に赴くとする、このときに西に赴かうとする意志は、

知識によつて導かれてをるといはなければなるまい。私達の日常の生活をみるに、或時には意志が情の支配を受け、或時には意志が知識の支配を受けることの度々あることを知つてをります。

意志が内から動く場合を考へてみます。意志が内から動くといふことは、外からの刺戟によつてではなく意志自身の願望によつて動くこととであります。かうした場合には、意志は感情の支配をも受けず、知識の支配をも受けず、意志自身の活躍によつて意志することになります。或人の刺戟によつて事をなすのではなくて、自分自らに事をなさうとするその心は、意志が意志自らの内にその本源を持つことになるのであります。意志が意志自身の内から動く場合に、意志の働きの内に知が展開してまゐります、又情が加味して來るのであります。私達

が、本然の要求によつて或事をしようと思ふときに、その要求それ自身である本願は、自己の完成のために前途を見る眼を開きます、これが智慧であります。眼を開いてその道を行くときに、力が加速度的に加はつて來ることがあります、これが感情であります。内から起る本願も、この知と、この情との加はることによつて始めて満足を得ることとであります。

かやうに考へてまゐりますと、本願は、それが外からの刺戟によつて動く場合には、或時には感情の支配を受け、或時には知識の支配を受け、しかし、本願が本願自身の本願から起るときには彼の内より知識を啓き、彼の内より感情を起すのであります。

知識といふ言葉は、感情と意志とをぬきにした等同辨意の精神作用に名けたものであります。それを智慧と申しますときには、感情と意志とを具有したところの等同辨意の作用に名くのであります。だから、知識といへば、人間の精神状態としては、実行力に遠いひとつの推理であります、しかし、智慧といふときには、実行力を持つた推理であります。吾々の精神状態に、物事を断定するといふことがあります、この断定するといふことは、知の働きであるか情の働きであるか意の働きであるかといふことを考へてみると、何れのひとつであるといふことも決められないやうに思ひます。断定には是々非々といふ知が加

はつてをります。同時にまた、断定には、それによつて動き出すところの意志も具はつてをります。又、断定には、断定自身を愛護するといふ情味も加はつてをります。だから、断定とか決意とかいふことは、知であり情であり意であるといはなければなるまいと思ひます。正確にいふならば、情・意を離れた知といふものもあるまいし、知・意を離れた情もないはずであります。

情と意とは餘程近いものであります。情は、或は意の相續性に起る變化とでもいふべきものであるかも知れない。だから、情を意に含めて、情意として一方の知に對して考へる人のあるのは無理のないことと思ひます。それで、私共の心理作用を考へてみるときに、知情意と三分するよりも、寧ろ知と情意との二分にする方が分り易いやうな

氣もします。知は思索的であり、情意は實行的である。知は冷性であり、情意は熱性である。知は受動的であり、情意は他動的である。普通に通に知識といへば、情意から離れた一作用のやうに考へるところから、智慧といふ文字をもつて情意と關聯して離るることの出来ない知識を現はすことになつてをります。それで、智慧といふときには、その内容として情意を含んでをるところの知識のことをいふのであります。佛典に智慧と申しますのは、梵語の般若といふ語であつて單な概念と概念との關係の上に發見せられた空理ではなくして、活きた血の通うてをる實行力を持つてをる心理なのであります。だから、智慧の本體は、本願であるのであります。本願が智慧を見ます。本願が根柢になつて、そこに智慧が啓かれてまゐります。ですから、智慧は本願成就

の行程であるというてもよい位であります。本願は彼自身の内からの要求によつて彼の足下を見、前途を見、彼の周圍を見ます。これが即ち智慧であります。

四。

ここまで考へて來て、願といふことと慧といふこととの意味は漸く明かになつたやうであります。そこで、私は、法藏菩薩の本願成就の生活の上において、この本願とこの智慧との關係をたづねてみようと思ひます。

先づ、第一に、『嘆佛偈』を調べてみます。始めに法藏菩薩は「願はくは我佛とならん、聖法の王と齊しからん、生死を過度して解脱せ

ざるはなからん。」と率直に自分の衷心の願求を述べてをられます。その次に「布施・調意・戒忍・精進、かくの如きの三昧と智慧とを上れたりとする。」と述べてをられます。この智慧を上れたりとするところが私の目星を附けるところであります。「願はくは我佛とならん。」の一節は法藏菩薩の本願であります。布施・調意以下はその本願を成就して行くところの生活状態を記したものであります。本願を成就して行く程には、布施も大事であり、調意も大事であり、戒も大事であり、忍も大事であり、精進も大事であり、三昧も大事である、それにもまして最も大事であるものは智慧であるといふのであります。法藏菩薩は「願はくは我佛とならん。」といふ願を建ててこの願の遂行のためには、智慧が第一であるというたのであります。願が純一であればあるだけ、

それが明るく光ります。その光りが智慧であります。その智慧に乗じて願が進展して行きます。

次に、私は、『三誓偈』を調べてみようと思ひます。『三誓偈』の始めには「我超世の願を建て、必ず無上道に至らん。この願満足せずば、誓ふ正覺を成らじ。我無量劫において大施主となり、普く諸の貧苦を濟はずんば、誓ふ正覺を成らじ。我佛道を成ずるに至つて名聲十方に超えん。究竟して聞くところなければ、誓ふ正覺を成らじ。」と最初にその本願を述べて、その次に至り「離欲と、深正念と、淨慧とをもつて梵行を修め、無上道を志求す。」と書いてあります。離欲と深正念と淨慧と、この三は並立すべき三ではなくて縦に重り合ふべき三であります。離欲から深正念が生れ、深正念から淨慧が生るのであります。

この淨慧によつて梵行を修むるやうになります。かくて、本願が成就して行くことになります。ここにおいても、淨慧が本願成就の生活の中心となつてをることが味はれます。淨慧は即ち智慧であります。

次に、私は、『無量壽經』に記されてある法藏菩薩の修行の一段を調べてみようと思ひます。『三誓偈』を説き了つて座に就くか就かないうちに、法藏菩薩は、「決定して必ず無上正覺を成ずべし。」といふ空中の聲を聞きました。さうして、彼は、かくの如きの大願を成就するため誠諦にして怠らなかつた。深く寂滅を願つて一生懸命に精進しました。さうして、不可思議兆載永劫の間、菩薩の無量の徳行を積植せられました。その間の心持を釋尊は次のやうに述べてをられます。

「欲覺・瞋覺・害覺を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず、色・聲・香・味・

觸・法に著せず、忍力成就して、衆苦を計らず、少欲知足にして染患癡なし。」と記し。次に至つて、「三昧靜寂にして智慧無礙なり。」と記してあります。この智慧無礙なりといふ語が着目すべき語であると思ひます。法藏菩薩が如何に兆載永劫の修行をして行かれたかといふに、その根本になるものは無礙の智慧であつたといふことになるのであります。

かやうに、法藏菩薩の本願と智慧との相を考へてまわりますときに、私達の求道の生活において、大いなる教訓と暗示とが與へられるのであります。

私は、をりをり本願それ自身の生活をするのだと宣言します、我々の生活は衷心の本願に乗託するより自然なる進展はないと宣言します、本願力に乗ずれば報土に到ると宣言します。すると、かやうな宣言を聞いて、何でも自分の願求ならばやりつけてよいと早合點をする人が随分あつたやうであります。或青年は、あなたが何でも願ふところをやるのがよい好きなことをやればよいといはれるのを盲信して私は藝妓買をしたり遊んだりしてとうとう學校を落第してしまひましたといひました。或老人は、あなたのやうに何でも自分の願ふところをやるのがよいといふと人間は随分善からぬ心を起すものですから青年などに聞かすと危険であると申しました。さきの青年のやうな人があるから、この老人の心配を無理とは思へなくなりります。昔から意志は

盲目であるといふやうなことを言ひ傳へられてをります、盲目意志といふ言葉もあります。自分の願ふところなれば側目をふらず精進するといふことを淺薄に聞き違へて、盲目的に滅茶苦茶に蠢動するのを本願成就の生活だと早合點をしてをる人もあるやうであります。そんなのが所謂輕舉妄動であります、そんなのは蠢動してをるのであつて、精進してをるのではないのであります。かうした誤解者が出るのは、私の表現の仕方があまりに粗雑であつたためであると自ら慚愧に堪へない次第であります。

眞劍に自己の本願を發顯するときに、本願自身に明るい眼が開いて來るのであります。そこに智慧が生れてまゐります。だから、決して輕舉妄動が出来なくなります。

かういひますと、我々の本願は他の智慧によつて検査せられなくてはならないのであらうか、智慧の認可を得た本願は正當であり、智慧の認可を得ない本願は不正當であるといふやうに考へて、常に自分の本願を智慧によつて検査することに努めなくてはならないのかと尋ねる人があります。私はさうは考へてはをりませぬ。本願は最上のものであります。本願を検査する智慧はあり得ようがないのであります。本願は、本願自身にて自らを明かにします。愈々その本願を成就するといふことになつて來ると、そこに智慧の眼が開いて來るのであります。かくて、本願が成就して行く道程においては、この智慧の導くままに進んで行かなくてはならないのであります。本願成就の生活者は他人の光りの中を歩むのではないけれど又暗黒の中を歩むのもあり

ませぬ。本願それ自身から發射するところの智慧の光りの中を心強く踏み間違はずに精進するのであります。

本願といふのは單な刺戟的な思付とは違ひます。さうした思付を超えたもつと深いところに湧いて出る願であります。生命がたくらみ出す願ではなくて、生命それ自身の流出するものが、私の所謂本願であります。この本願には、屹度智慧の光りが輝いて來るのであります。

六。

本願を提唱した私は、この頃に至つて本願成就の道程における智慧といふことに多大な興味を感じてをるのであります。さうして、『一切經』を考へてみますと、何れの經典もみなこの智慧を指さしてをるこ

とに氣附くのであります。なかんづく、『摩訶般若經』はこの智慧を的確に説いてあります。『華嚴經』だつて、『涅槃經』だつて、『法華經』だつて、『無量壽經』だつて、この智慧の開顯でないお經はないことを知りました。釋尊は、何れの場合にも求道者の生活として六度といふことを教へられます。それは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧であります。そのうち、智慧がその中心をなしてをることは、私が新しくいふまでもないことであります。ギリシヤのソクラテスやフラトンが人間の徳を數へて、智慧と勇氣と節制と正義と友愛との五つにしてをります。そのうち、彼等は、智慧をもつて最上の徳としてをることも思ひ合はせらるるのであります。

七。

かやうに考へて來るときに、願慧といふことの意味が略ぼ明かになつて來るやうに思ひます。願は本願であり、慧は智慧であります。本願によつて智慧が生れ、智慧によつて本願が成就して行きます。かくして、三界の雄となることが出来るのであります。世界のうちに最も強くなり得るものは、誰であるかといふならば、本願に裏附けられたる智慧の所有者であるといふことが出来るのであります。

法然が智慧の念佛といひ、親鸞が信心の智慧といひ、道元が佛智見というた。私は、つくづくこの智慧の眼の光ることを、自他の上に念じてやまないであります。純一なる本願とそれに生るる深廣なる智

慧、これによつてこそ、我等は、永遠の上に大勇士となつて活躍することが出来ると思つてゐる。我等は、永遠の上に大勇士となつて活躍することが出来ると思つてゐる。我等は、永遠の上に大勇士となつて活躍することが出来ると思つてゐる。(大正一三・一二・三)

九。二月十五日の記

去年の三月母の忌明のをりに納骨をするはずであつたのが、逃へておいたお骨の瓶が出来上らなかつたので、止むなくこれを延ばして中陰壇をもとのとほりに飾つておいた。その後瓶は出来て来たのだが、納めるのが惜しくて、ずつとそのままにしておいた。花を捧げたり、いろいろの供物をそなへたりしてをると、母がいますやうに思はれて、つい月日がたつてしまつて、いつ納めようといふ日がなくなつた。それで一周忌のをりに納骨しようと思つてゐた。ところが、一周忌は二月につとめることになつたので、祥月命日には納骨しようと思つてゐ

た。さうするうちに十二月の二十九日に豊子が死んだので、そのお骨を母の横に飾り、これを機として新しく檀を飾りなほして去年の母の喪に籠つたやうに七々日の間その室に籠つて思ふ存分勉強しようと思つて心を決めた。朝から晩まで一室に籠つて眞田君から本をよんで貰つた。そのうち納骨はいつにしようと思つてゐた。私の一面の心は、一生お骨の側に籠つてかうしていろいろの古聖の教にふれてゐたいやうな氣もした。また一面には、このお骨を墓に納めて愛する人達の心を自分の心の上に抱きしめて、いろいろの働きもせねばならぬやうな氣もする。いろいろ考へてみた上で、やはりお骨は墓に葬つて身輕になつて働くのがよいやうに考へた。それで、二月の十五日は釋尊の御涅槃の日でもあり、豊子の七々日の日でもあるので、その日に納骨しようと思つてゐた。讀みたいと思つてゐた『印度古聖歌』、『ウパニシヤツト全書』、『耆那教典』、木村龍寛氏の『ウパニシヤツト物語』、高楠氏の『印度哲學宗教史』、木村泰賢氏の『印度六派哲學』、その他いろいろの書物を読み了つたので心がややすがすがしうなつた。

二月十五日の朝になつた。東窓の寢室には日光がさしこんでゐた。北國には珍しい日和なので、今日こそ納骨をしようと思つて床を出た。母のお骨を納めるために特別な瓶を焼かしたついでに、十三年前に亡くなつた房子のお骨も文學さんのお骨も更めて特別な骨瓶に入れたいと思つて三つ一しよに拵へました。ところが又一つ豊子のお骨を入れるのもほしくなつた。が、それがすぐに出来ないで、今度本堂の銅の樋を拵へた人が來たので思ひついて銅の小箱を造らした。それ

が晝頃に出來上つて來た。その箱の裏面に字を書いた。總子がその字を熱心にナイフで刻んだ。それがよく私の筆法が出てゐるので嬉しかった。母のお骨は母のために造つた瓶に移し、豐子のお骨はその銅の小箱に移し、更めて檀に飾り、それから、私は總子と墓に行き、岩の唐戸を明けて墓の中に私は這入つた。十三年前に納めた房子のお骨の箱も文學さんのお骨の箱も朽ちてゐた。その中からお骨を擱んで新しい瓶に移した。いろいろのことが思ひ出されて來た。やがては自分も骨となつて納められるべきこの墓の中へ私はこれで二度這入つてみた。熱い血の通うてをる世の中に生きてをるも面白いが、骨になつてかうして靜な室に籠つてをるもよいなと思つた。やがて再び家に入りお骨の前で更めて讀經をした。隣玉さんも共にお經を讀んでくれられ

た。その間に田中君はシヤベルで墓所の雪をわけてくれた。お經が了つてみんなが焼香をした。近所の二三の女達も來合した。さめざめと泣いてをる人もあつた。お骨をお墓に納めて、その前に供物をみんな捧げ、再びここで讀經をした。さうして、いろいろの供物を墓前で燃した。その中に十三年前の古いお骨の箱をも燃した。造花に三方に火がめらめらと燃え移つてゆく、烟が勢ひよく立ち昇る、如何にも氣持がよい。先日から讀んだ『ウパニシャット』に印度人が火の神アグニを祀ることが書いてあつた。又『アエスタ』にペルシヤ人がアフラ・マズタの子として火を拜むことも書いてあつた。それらの人達の心がよく分るやうに思つた。ふと横に立つてをる本堂や庫裡を眺めてついでにみな燃えて了うたら面白からうと思つた。さうして、その中に自分も

燃えてしまふたら一層面白からうと思つた。でも、熱からうと思つた。そこらあたりのものをみんな燃してしまふたら面白からうねといふと、側にゐた人達が笑つた。すべてが灰になるといふことも面白いことである。原始佛教の灰心滅智の涅槃の思想をわけのある考だと思つた。恩も灰にしよう、怨も灰にしよう、愛も灰にしよう、憎も灰にしよう。随分さつぱりしたよい気分だ。供物はみな燃えたが、古いお骨の箱が中々燃えないので、新しい薪を加へてこれを燃やし盡さうとした。實は永い間ここに火を焚いてゐたかつたのである。しまひには石油を持ち出して元氣のよい火を燃してもみた。あまり永く火を焚いてゐたので一しよにゐた人達はみな家に這入つた。孫が乳を呑みたいといつて泣くのをすかしながらしまひまであるといつてゐたお鶴さんも

家に去つた。最後まで私の側にゐた人は總子とお菊さんとはばかりであつた。そこへ村の安田さんが何をしてをるといつて門から這入つて來た。さうして火を焚くのに手傳つた。もうすつかり燃え盡したのは夕方であつた。鍬を持つて來てお菊さんがその灰を前に流れてをる小川の清らかな水の中に流した。ペルシヤ人が河の神アナヒタを拜む心を考へた。さうして先日讀んだヘルマン・ヘッセの書いた『シツタルタ』のことを思ひ出した。シツタルタが河の聲に聞きとれて常に河と語り合つたことなども思ひ出した。すべてが灰になる、すべてが水に流る、すべてが土になる。さつぱりした氣持だ。南無阿彌陀佛を口ずさみつつ家に這入るともう室内に電燈が燈つてゐた。夕餉の用意も出來てゐた。お骨の室にはいるとデッドマスクと寫真とがそのままになつてゐ

たので、またそこで本を讀んで貰うて今夜もそこにゐて讀經をした。
いよいよ母も豊子もお墓に這入つた。もう私は泣くまい。これから身
輕になつて働かう。かう思ひつつやはり涙が湧いて來た。晴れたり、
曇つたり、變る心の空を面白いと再び觀照した。かくて、更くるまで
本を讀んで貰うて、すがすがしい心持になつて床に就いた。

(大正一四・二・一八。)

一〇。忍受による超越

(叔父の死にあひて)

一。

二月の二十一日に法事を了り、二十二・三兩日に跡始末をして、四
日に宅を出て、二十五日には神戸から船に乗つて沖繩の方に渡る豫定
をしてゐたところ、沖繩の方から神戸出帆の船が小さいから、二十六
日に鹿兒島を出る船に乗つて來いといふ電報が來たので、直ぐに鹿兒
島の方の知人に電報をもつて船室をとつて下さいと頼んだ。すると、
二十六日には船が出ないといふ返電があつたので、二十四日に出發す

るのを見合して二十五日に出發しました。さうして、二十六日の夕方鹿兒島に着いた。鹿兒島に着いてから、商船會社の方を聞いて貰ふと、二十七日にも船が出ぬといふことであつた。二十八日になつてもまだ船は出なかつた。海上がしけてをるといふことである。三月一日に漸く大義丸が出帆した。二日に大島に寄航するまでは、波はあまりなかつた。二日の夕方から波が荒くなつて随分船が揺れた。船には酔はなゝいものと決めてゐた私も随分ひどくやられた。頭痛がする、嘔吐を催す、四十度の熱發のときくらゐの苦しさである。こんな苦しい目に遭ふくらゐならば、出てくるのではなかつた、といふやうなめめしい氣も起きた。苦しい間には早く時間が経過してくればよいと、しきりに念ぜられた。三日の朝になつて海上が穩かになり、船が那覇に着い

たをりには、よい日和であつた。船室まで田原君が来てくれられ、船を出ると、舊知の方々が二十人ばかり居並んで迎へて下さつたので、もうすつかり船中の苦しさも打ち忘れ、来てよかつたといふ喜びに打たれた。三日の日は疲れただらうといふので講演會を開かず、夜分に慰勞の宴が張られた。私は、十年前に始めてここに來り、六年を経て再びここに來り、それから三年目に今度三回目に來たのである。近づきの方が多くあるのでのんびりした一夜を過した。四日には午前と夜と二回眞教寺で講話をした。五日にも午前と夜と二回講話をした。五日の午後には中城小學校に行つて、附近の教師達のために講話をした。この學校は仲吉君が校長をしてをるところである。六日の朝、朝飯をたべてをるところへ女中が電報ですと持つて來た。直ぐに披いて

みると、宅からの電信で、「隣玉叔父急病今朝二時死す。」といふのである。一三度繰り返してよんでみた。それでもまだ読み間違ひでないかと思はれたので、女中にも読んで貰つた。が、間違ひではない。二十日に宅を出るをり、隣玉さんが玄關に見送つてくれたので、「いつでも私が旅に出ると叔父さんが病氣を出しなされる。今度は病はぬやうにしてゐて下さい。」といふと、叔父は、「わしは大丈夫です、あなたこそ病はぬやうに大事にして行つて来て下さい。」というてゐたのでした。その叔父が死んだといふのです。ちよつと信じられないわけでありませぬ。

隣玉さんは、父の第四番目の弟であります。安政五年に生れたので、本年は六十八歳になります。三十九年前に父が死んで以後終始一貫し

て寺の法要をつとめてゐてくれました。私が、寺の住職でありながら、葬式や法事に馳せ廻らずに、讀書や講演に時を費すことの出来たのは、全くこの叔父の内助の力によつてであります。平素から壯健を誇つてをる人で、今年の春あたりから胸が痛いといひつつ、ろくに養生もせず、に大丈夫だというてゐたのでした。死んでみると、やはり、その時分から病氣がきざしてゐたのらしい。

叔父の死の電報を受取つて、暫く私は、歸らうか、ここにゐようかと考へた。何分千里を隔つたところに来てをる。沖繩の知人の方々は、昨年以來私に聞かうとして待つてゐたのである。一週間もゆつくり語り合ひたいと思つてをるのに、僅か二日ばかりで歸つては、あまりにあつけないやうでもあり、諸君にすまないやうな氣もする。又死んだ

叔父のことを思うてみると、歸らなければならぬやうな氣もする。叔父には子がなかつた。最愛の夫人がひとりあるばかりである。平素から死なれたら私が萬事世話をするというてゐた。私の不在中寺務のことについては常に妻の相談相手となつた叔父が突然死んだので、妻も當惑してをらう、叔母も弱つてをらう、尤も親類や知己の人達が萬事世話をしてくれるには違ひはないと思ふ。が、今一度叔父の顔がみたいやうな氣がする。それで、給仕をしてゐた女中に今日發つ船がないかといふと、午後に臺北丸が發つといふ。臺北丸は二千五百噸の船で神戸へ直航するのである。この船は沖繩通ひの船として最もよい船なのである。歸るとすれば、よい便船と考へた。とにかく、田原君や私を招いた方々にお願して暇をいただかうと考へて、眞教寺の午前の講

話に行つた。田原君にその事情を語ると、同君は私の悲しみを受け容れてくれられて、他のお友達の方とも相談し、快よく午後の船で發つことを承諾してくれられた。それで、私は宅の方に「直ぐ發つ、葬式は十一日にせよ。」といふ電信を打つた。さうして、お名残に午後になつてもう一回講演をすることを約した。午前の講演も午後の講演も私の心は緊張しきつてをつた。

沖繩の他の方へ行く約束のところへはお断りをし、歸途講演會を開くやうになつてゐた福岡市の友人にもお断りをして、愈々午後四時出帆の臺北丸で發つことに決定した。ちやうどをりよく午前の講演に臺北丸の船長が來られたので、同君に萬事を依頼した。さうして、田原君始めみなさんが出發の用意を總がかりでしてくれられた。かくて、

私は、六日の午後四時に那覇を出帆することになりました。

二。

七日の午前に大島に着くまではよい風であつた。七日の正午に大島を出帆する頃から荒れ出した。相當に大きな船であつたが動搖がはげしかつた。千噸位の船ならば、とても、航海はむづかしいと船長は語つてゐた。夜になつて、波は益々はげしく、スクリウが空廻をする有様であつたので、随分ひどく酔うてしまつた。何んでも船中で食事をしたものは、十人に一人くらの割合であつたとボーイさんが語つてゐた。悲しい思をいだいての船旅であるだけに一層身體も苦しかつた。それでも八日の朝から凧いで來たので、船の動搖もやみ、船酔もだん

だんに薄らいで來た。船が日向灘を超え土佐沖を過ぐる頃には、靜かな航海であつた。夜分ボーイ達が芝居をして、三百人あまりの乗客を慰めてくれた。同乗してゐた人の中に嘗て長崎の醫専で私の話を聞いた有吉氏が講話をしてほしいといふのと船長の深見氏が望むのと同じに動かされて、私は同船の三百人あまりの人達に一時間ばかりの講話をした。船中で講演をしたのは今度が始めてであつた。夜更けてから甲板に出ると、月は明るく輝いてゐた。その下に立つていろいろのことを考へた。

三。

去年の一月に母を失ひ、その悲しみの去らないうちに、父の第五番

目の弟である鳥越願回さんを七月の末に失うた。今度亡くなつた隣玉さんはこの二人の老人達が死んでから、痛く寂しがつて弱つてをられた。私は始終旅にをるし、宅にをるときも研學に没頭してをるので、叔父とゆつくり茶を飲んでをる暇もなく、いつも茶飲相手であつた母がゐないので叔父は寺に來てもよほど寂しかつたらしい。それに、もう一人の弟であつた願回さんに先き立たれて、大變に寂しいというてゐました。私は、母に別れ、叔父に別れたので、何となく年老がなつかしくなり、これまでになく一人残つた叔父に親しい心を持つやうになつた。叔父も一層やさしくなつたやうであつた。

十二月の末に、力にしてゐた豊子が往つたので、私の悲しみは益々深められた。その悲しみもまだ去らぬ間に二月十五日に母と豊子との

お骨を墓に納めたをりには、まめまめしく世話をしてをられた一人の叔父、その叔父がもうゐなくなつたのである。二月の十九日から二十一日まで、母の一周忌と、十三年前に死んだ父の第二の弟であつた叔父文學さんの十三回忌と、十三年前に私を黒暗の中にひとり残されたやうな氣持にして世を去つた先妻の法事とを兼ねて執行して、悲しい思出に泣いたのであつた。その法事のをりには隣玉さんは萬事世話をしてをられた。私が眼の悪いのと、細かいところに身體の廻らぬので隣玉さんは萬事心を配つてくれました。この叔父さんがあるのもまだよいなと思つてゐた。本堂が美しくなつたのを隣玉さんが見て喜んでくれたのは私のせめてもの喜びであつた。このたつた一人の叔父が俄にこの世を去つて往つた。

私にはどうしてこんなに悲しいことが重なつて来るんだらう。大波の後に大波が襲うて来る。何んだか自分もその波の中にかきさらはれて行くやうな気がしてならぬ。益々深く火宅無常の世界を感じしめられる。さうして、一切皆空の相も益々明かに感知せられるのである。ああ、死ぬのだ、誰も彼も死ぬのだ、昨夜波が荒れて船のスクリウが空廻したをりに、このまま船が沈んでもよいなと思うた。今、月の甲板に立つて、きらきらと光る波を見て、このまま永遠の沈黙に入るのも面白いといふ感じも受けた。でも、進んでそこへ飛込むほどの切迫した厭世観にも打たれてゐない。悲しい我を照す月があるやうに、悲しい自分を見る静かな自分があるので、悩みつつ、苦しみつつ、いつも、私は、それを超える世界に行くことが出来るのであります。

四。

月光の下に、いろいろのことを考へてをるうちに、海上の風は肌をつんざくやうに寒くなつて来たので、船室にはいつた。しかし、心が冴えて眠れなかつたので、歌などを多く書きつけた。

叔父は、學問をしなかつた人であつた。ただ、その學問のない自分をよく知つて、相愛の妻と二人寺の前に小庵を結んで心靜かな生活をしてゐた。奢らぬ人であつた。子供がないから病氣にでもなると困るといふて、あまり澤山の収入でもない中から、少しの蓄財もしてをられた。私は、をりをり、小遣錢に困るときには、この叔父から取替へて貰つた。私が金の遣ひ方がただくさなので、叔父はいつもあなたは

感心だと驚き、わしらはあなたのやうな眞似は出来ないというて至極
つつましい暮しをしてをられた。いつでも私のところへ集まる珍らし
い品物をみては喜び、食物はあなたのお蔭で珍しいものをいただけ
るというて喜んでおました。私は常に子供がなくても心配なさるな、
叔父さんも叔母さんも畢竟私が命さへあれば御不自由はさせませぬと
いうてゐた。叔父は、年取つて働けなくなつてからあなたの厄介にな
りたくないから節儉をして蓄財をするのだというておました。どれだ
けの財が残つたか、私は知らないが、とにかく、叔父のこの心がけが
しをらしいと私は思うておます。

五。

九日の午前に神戸に着くはずであつた船は、七日の夜のしげのため
に六時間ほど遅れたので、午後一時過に漸く神戸に着いた。それから、
宅の方に行く汽車は午後六時頃に出る汽車までないので、それを待ち
合はし九日の夜汽車に乗つて、十日の午前五時半に松任驛に着き、一
刻も早く叔父の顔が見たさに、自動車を走らせて歸つた。玄關に迎へ
に出た叔母は、わしにすがりついて泣いた。わしも背をさすりつゝ泣
いた。すぐに奥の廣間にはいると、叔父の死骸は、既に棺に納められ、
沖繩から電報でいうてよこしたやうに、母のをりと同じく佛像を飾り
その前に柩が安置せられてあつた。顔の見えるやうに、硝子をあてて
あつたので柩の外から叔父の顔を見た。もう五日になるのに相好はち
つとも壞れてゐなかつた。どうでもしてわしの歸るまで身體の壞れぬ

やうにと思つてフォルマリンの注射をしておいて貰うたと妻は語つた。よいことをしておいてくれたと思つた。

ぢいつと叔父の顔を見てをると、叔父の顔の動くやうに感ぜられたので、叔父さんの顔が動くといふと、妻は後から電燈が動くのだといふて電燈をもつて棺の中を照らしてをりました。私は、靜かに合掌して、永い間のお世話になつたお禮をいひました。それから、萬事殆ど我が家の如く親類や村人が葬式の準備をしてあつたので、私は、今更の如く諸君の厚意に感謝せざるを得なかつた。かくて、十一日の午後二時に無事に茶毘の式を了へ、十二日には拾骨をすることも出来ました。

六。

それから、今日まで約十日になります。が、まだ、私は、ぼんやりしてをります。尤も十四日から十六日までにエヂプトの古書『死者の書』の上巻を聞き、十七日には高木氏の法事に参詣し、十八日から自宅で彼岸會の讀經をし、午後二時からと午後八時からと二時間づつ二回今日まで『四十八願』を講じてをります。しかし、諸方からいたただいた澤山の文に對して急を要するものの外はまだ一通もお返事を書く元氣さへないのであります。こんなに悲しいことが、その次その次へと襲うて來るので何んだか面喰ふやうな氣がします。これまで私の經て來た道を考へてみても、私の知合の人達の心情にあてて考へてみても、

何かひとつ難が出て来ると、そのあとに追ひかけ追ひかけ襲うて来るもののやうであります。十三年前に先妻の房子が亡くなつたときにも、二年ばかりいろいろのことが、私の一身上に迫つてまゐりました、身を切らるゝやうな苦しみを受けてました。それから、十年ばかりはあまり荒い波にも遇ひませんでした。然るに、昨年一月母を失うて以来は、随分荒い波がその後とよせてまゐります。痛手は、その傷の新しいものほど痛くて、古くなるに従うて痛さが減じてゆくものであります。しかし、十年以前に私に襲うて来た波は、私の衷心まで襲うて殆ど息の根も繼げないほどに惱ましぬきました。今から思うてみても、随分ひどい坂だつたなと思ふくらゐです。それがために、私は、なまぬるい搖籃からひきずり出されて、手ひどい試練に鍛はれました。お

蔭で獨立獨行の精神を味ひ、菩提樹下に成道した釋尊の心や、『無量壽經』に開顯せられた阿彌陀佛の心をしみじみ味ふことが出来るやうになりました。あの試練がなかつたら、決して私の今日のこの広い世界は開けなかつたと思ひます。今から回想してみると、あの試練はこの天の寵兒を育てる大なる恩惠の警策であつたと思はずにはゐられないのであります。それから、十年小さな波が常に襲うて来ました。大きな波は起つて来ませぬでした。それがために、私の心は、多少のいごりをもち、さびを生ずるにいたつたやうであります。昨年の母の死以来の引續くこの悲しい別れによつて、だんだんと、いごりを清められ、さびを磨かれるやうに思はれます。さびもこきついてしまふと、これを取り去るときには正身が痛みます。痛切な別離に遭うて、私の心の

痛むのは、その痛みなのであります。この頃或人が面白いことを聞か
してくれました。その人はふしだらな養子を離縁するために法廷に訴
へました。數ヶ年の争ひの後、或控訴院で數千圓の手切金を出して離
縁をするやうに判決しました。そのをりに、判事のいふやう、身體に
出來た瘤は身體の不用物だからこれを取除くのであるが、これを取除
くには多少の血を流すことを辭してはいけない、君も不用の養子を出
すのだが、一度君の財産に引附いた以上、それを取除くには多少財産
上に痛手を負はねばならぬというたさうです。知人は判事は中々面白
いことをいうてくれたと私に語つてをりました。いらぬ病でも取除く
には赤い血を流さねばならぬ。肉身の親や、叔父や、自分の力にして
ゐた人が、自分を離れてゆくのに、どうして心の痛みを感じずにはを

られませう。痛みは強い、強いがゆるゑに驚きも甚しい、驚きが甚しい
から覺醒もせられます。私達は、獨立者だといひつつ何かに頼らうと
します。頼ることが久しうなると、殆どそれのみに託しようとしています。
かくて、自分は、その頼るもののために亡びにはいつてゆきます。私
達の心は、なまぬるい氣のうちに眠らうとします。さうして、安價な
平和に足をとどめようとしています。親しいものの別離、事業の失敗など
は、これに對する自然の警策であります。去年から今年にかけて引續
く痛手のうちにあつて、殆ど氣がぼんやりするほどになつてをるので
はあるが、その中に私は靜かな心を見えます。いや、さういふよ
りもむしろ靜かな心でこのぼんやりしてをる自分を見えます。靜
かな心は語ります、お前は益々強くなるのだ、お前は益々ゆたかにな

るのだ、お前はほんたうの意味における合掌を味ひ、獨立者の廣い世界を味ふやうになるのだ、力をおとすな、生き生きとして立ちあがれ。悲しいことや痛ましいことは、決して望ましいことではありませぬ。だから、この上、荒い波のよせくることを決して望んではおませぬ。しかし、今の私には、さあ何でも来い、あるだけの難は襲うて来い、私は力限りそれを味うて行かう、悲みによつて痛みによつて私は益々高く昇らう、廣く伸びよう、と心中に叫んでをります。吉田松陰が、うきことのなほこの上につもれかし限りある身の力ためさんと詠じた歌を思ひ出します。さうして、艱難汝を玉にす、といふ言葉も思ひ出します。「たとひ身は諸々の苦毒の中にとどまるとも忍んで終に悔いじ。」といふ言葉も思ひ出されます。

七。

私は、これまでは、難が来るときにこれと戦ふといふやうな氣分ではありません。しかし、今日では全然この戦ふといふ氣分がなくなつたといふわけではないが、むしろ、忍受するといふ氣分の方が強くなつて来たやうであります。どんな悲しいことでも、どんな苦しいことでも、忍受しよう、進んでさういふことを求めることはしないが、來るものならば靜かにそれを受けよう。十三年前に私が苦しみに泣いてゐた頃、姐の上に載せられ、將に料理せられんとする鯉の身體に自分を發見したのであります。姐の上になづとしてをるあの鯉の態度を實になづかしう思ひます。どんな筈でもどんな刃でも受けてゆかう、

遭ふだけの別にも遭はう、流すだけの涙をも流さう、絞るだけの血は絞らう。戸惑うてはならぬ、慌ててはならぬ。来るものを静かに受けるこそ、来るものを超える道である。今から思うてみると、十三年前の私は来るものに驚いて自分を忘れ、ために益々自分を苦しみに陥れたやうであります。その痛い經驗によりて育てられたお蔭によつて、今度は悲しみの中に静かに身を保つことが出来るやうであります。悲しみに遭うてこれを紛らさうとする心は、却つて悲しみを重ねます。悲しいときには存分悲しみに沈みぬくのです、道はそこから開けて來ます。痛手を負うたときに慌てて飛び返るから血が流れます、痛さを忍んでちいつと傷口を抑へてをる心持にこそ、痛さを超える力が生れて來ます。昔の禪僧が、「心頭を滅却すれば火もまた涼し。」というた

ところの心の味ひは、静かに猛火を忍受するものの超越境であると思ひます。病苦が襲うて來るときに、これを去らうとしてもがき、これに打ち勝たうとしてあせる。それがために、病苦は益々進み、病勢は益々盛んになる。然るに心を静かにし、病苦を客觀視し、病苦にひたり、病苦を忍受するやうになると、病苦は自然にその身を去つてゆくのであります。敵は敵するもののために猛威を振ふことが出来るけれど、敵せざるもののためには遂にその猛威を失はずにはゐないのであります。

私達は難の襲うて來るときに、その難に打ち勝たうとしたり、その難をのがれようとあせる前に、心を静かにして、この難を見、難に苦しむところの自分を見、この難の最も猖獗を極むる相を見、それがた

めに最も痛むところの自分を見る。かくすることによつて、自分は難を受け、自分の位置を超えて、難と難を受けて苦しむものと二つながらを脚下に見るところの自分となつて生れ出るのであります。かくなくるときには、自分に降り来る難を見ること、窓外の吹雪を見るが如く美化して感ずるやうになります。かくすることが一面現實生活の藝術化ともいはれませう。自分を超越る自分に住するときに、現實の自己を超えた、より高い現實の自己に生れるのであります。ニイチエが超人を語つた、その超越の相、『無量壽經』に度々繰り返された超越の境は、忍受者にして始めて往生出来る境地ではあるまいかと思ひます。悲しいときには悲しみぬくのがよいのです。泣きたいときには、涙の涸るるまで泣けばよいのです。苦しいときには苦しみぬくのです。私

達は、悲しいことでも、苦しいことでも、これを他のものによつてごまかしてはなりません。それによつて眠らうとする眼を見開き、深く悲しみに沈むと同時に、その悲しみと悲しみに沈む自分とを見るところの自分に生れ出なければなりません。かくすることによつて、私達は、襲ひ來るところの大波に常に首を出して息づくことが出来るのであります。大波の中に四肢を投げ出してをるだけの忍受の心だにあるならば、自然に頭は波の上に現はれて、大氣を吸ふことが出来るのであります。

私は、重ね重ねに襲はれるこの悲しい別に際して、一時はぼんやりした心にもなりますが、一度は一度だけ自分の小さな城廓が壊されて、廣い世界との交通が開けてゆくやうに感じます、それから、心は益々

進んでゆくやうに思ひます。また静かになつてゆくやうであります、益々何物にも頼らずして何物にも頼る心持を味ひゆかれるやうであります。誰をも愛せずして一切を愛し、誰にも愛されずして一切に愛せられる、不可稱・不可説・不可思議の靈境が、ほのかに私に近づいて來るやうに感じてをります。(大正一四・三・二二)

一一。苦を觀じて

一。

吾々が感ずるいろいろの感じのうち、苦しいといふひとつの感じがあります。その感じはよほど吾々がいやがつてをることであり、苦しいといふ感じの裏にはその苦しみから脱れ出でずにはゐられないといふ心持が封じ込められてをります。ひどうなると、こんなに苦しい位ならば、死んでしまふたらしだといふやうになるまで考へるのであります。さういふことからして、苦しみを脱れたい、苦しみを脱れたいがその力が自分にはない、だから、その力を神佛に祈つて助け